ISSN 0919-7850

名大トピックス
NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.154
2006年3月

名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボードを開催

http://www.nagoya-u.ac.jp/

目次

●ニュース
名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボードを開催 2
平成18年度名古屋大学入学試験を実施 5
第７回経営協議会を開催 5
平成18年度アジア・アフリカ学術基盤形成事業に採用される 6
平成18年度アジア研究教育拠点事業に採用される 7
名古屋大学マネジメントセミナーを開催 8
体育課外活動施設の寄贈者に感謝状を贈呈 8
IB 電子情報館が名古屋市都市景観賞を受賞 9
第２回女子学生エンカレッジセミナーを開催 9
●知の先端
国際貿易理論の２つの研究：公共財のある場合の貿易利益の問題と戦略的貿易政策の内生的タイミングの問題 10
多和田　眞（大学院経済学研究科教授／高等研究院教授）
●知の未来へー若手研究者の紹介
都市にまつわる不思議を考える　佐藤　泰裕（大学院環境学研究科助教授） 12
●オフタイム
ちょっと、劇場へ　杉山　寛行（大学院文学研究科長・文学部長） 13
●教育のデザインとプラクティス
官学連携による生命技術科学教育の推進　柘植　尚志 14
（大学院生命農学研究科教授／大学院生命農学研究科生命技術科学専攻長）
●同窓生から
プラネタリウムから広がる世界　毛利　勝廣（名古屋市科学館学芸員） 16
●世界につながる
消える！？アマゾンの危機 ～木を使うことが森を守る～ 17
鈴木　理恵（大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻博士課程前期課程２年）
●学生の元気
舞台の上の開発誌　前田　直人 18
（大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士課程後期課程３年）
●職員から
医事課患者サービス掛の役割とは（苦情相談について） 19
川瀬　敏子（医学部・医学系研究科医事課患者サービス掛主任）
●キャンパスクローズアップ
医学部附属病院　新中央診療棟（最終回） 20
●部局ニュース
ミシェル・ザンク博士の講演会を開催 22
中等教育研究協議会を開催 22
2005年度法学部公開講座を開催 23
李遠哲博士の講演会を開催 23
第10回理学懇話会を開催 24
平成17年度工学研究科懇話会を開催 24
医学部附属病院新中央診療棟の施設紹介が行われる 24
「体の一部を再生する新しい医療」を開催 25
医療セミナー「質の高い連携医療の確立に向けて」を開催 25
UFJ 環境財団寄附講義総括シンポジウムを開催 26
「文理融合型エコシステム科学の展開」ワークショップを開催 26
ICCAE2005年度第７・８回オープンセミナーを開催 27
第18回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催 27
第８回博物館企画展を開催 28
博物館が中学生の職場体験学習を受け入れる 29
日本語ボランティア研修会を開催 29
先端技術共同研究センターが高度技術研修を開講 29
●退職される理事のことば 30
●定年退職される教授のことば 31
●本学関係の新聞記事掲載一覧　平成18年１月16日～２月15日 43
● INFORMATION
第９回名古屋大学博物館特別展「スポーツと名古屋大学ーする みる つくるー」 46
附属図書館2006年春季特別展「『地獄物語』の世界ー江戸時代の法と刑罰ー」 48
●イベントカレンダー 49
●トピックスの表紙で綴る豊田講堂の一年 50
●ちょっと名大史
名古屋大学と歌 52

名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボードを開催

第１回名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボード（国際諮問委員会)が、２月６日（月)、７日（火)、名古屋市内のホテルで開催されました。

この委員会は、本学の学術研究・教育の更なる充実・発展を図るため、総長の諮問機関として設置されたもので、ノーベル賞受賞者３名を含む国内外の著名な学識経験者７名で構成され、本学の教育・研究活動の現状等について国際的水準に照らした評価等に基づく助言・提言を行います。

第１回である今回は、高等研究院の研究活動全般、若手研究者の研究等に様々な意見をいただき、２日間の会議を大変有意義に終えることができました。

初日は、平野総長から歓迎のあいさつがあった後、議長に野依良治委員（本学特別教授）を選出しました。次いで、本学や高等研究院の概要、研究活動等の説明及び若手研究者によるプレゼンテーションが行われ、これを受け、野依議長の司会により、高等研究院への提言内容について、「卓越した研究の発掘」、「最前線の研究者に対するサポート」、「学際的・国際的研究の振興」、「独立した立場から、大学の学術研究についての権威ある助言」、「科学に対する社会の認知の促進」に焦点を当て、意見交換が行われました。

２日目は、初日の議論を踏まえ、高等研究院に対する提言案が議論されました。その内容は、「研究プロジェクトの促進・評価」、「研究環境のあり方」、「研究成果の発信」、「組織・運営のあり方」の４項目にわたり、「高等研究院の存在意義は高いが、運営方法には改善の余地がある」、「国内外の優秀な研究者をより効率的に発掘し、リクルートする必要がある」、「将来性の高い研究者、特に若手研究者を発掘するには、個人的な面談・交流が有効な判断基準となる」、「著名な研究者を招へいすることが、大学のプレゼンスを高めることに寄与する」、「科学研究の知識を十分に有する専門的職員の配置が望まれる」等の提言がありました。委員会では、これらの提言を取りまとめ、「総長への提言」とする予定です。

[会議日程]

2月6日（月）	
9：30	開会：平野総長
10:00	名古屋大学の概要、研究活動等の説明・質疑応答
10:45	高等研究院の概要説明・質疑応答
13:30	高等研究院の研究活動の説明・質疑応答 福井　康雄 理学研究科教授［物理学分野］ 近藤　孝男 理学研究科教授［生命科学分野］ 磯部　　稔 生命農学研究科教授［化学分野］ 佐藤　彰一 文学研究科教授［人文学・社会科学分野］
15:40	若手研究者による研究プロジェクト提案説明・質疑応答 山口　茂弘 理学研究科教授［化学分野］ 関　華奈子 太陽地球環境研究所助教授［地球惑星物理学分野］ 奥地　拓生 環境学研究科助手［地球惑星科学分野］
16:50	高等研究院に対する意見（司会：野依議長）
18:00	終了
2月7日（火）	
9：30	高等研究院についての提言案とりまとめ（司会：野依議長）
11:30	閉会：平野総長・北住高等研究院長
11:40	記者会見

1　あいさつする平野総長
2　会議の様子
3　記者会見

［委員］

赤﨑　勇 博士
名城大学特任教授、名古屋大学特別教授
［専門分野］　半導体工学・電子材料学
［略　歴］
1981年　名古屋大学教授
1995年　化合物半導体国際会議賞、H.Welker 金メダル受賞
1997年　紫綬褒章受章
2001年　名城大学特任教授
2004年　文化功労者顕彰

Louis J. IGNARRO 博士
UCLA 教授、名古屋大学名誉博士
［専門分野］　薬理学
［略　歴］
1979年　チューレン医科大学教授
1985年　UCLA 医学部教授
1994年　ラッセル UCLA 賞受賞
1995年　チバ高血圧研究奨励賞受賞
1998年　ノーベル医学生理学賞受賞
2004年　名古屋大学名誉博士

池端　雪浦 博士
東京外国語大学長
［専門分野］　歴史学
［略　歴］
1989年　東京外国語大学教授
1998年　人文学名誉博士（フィリピン大学）
2001年　東京外国語大学長、文部科学省科学技術・学術審議会委員

李　遠　哲 博士
台湾中央研究院院長、名古屋大学名誉博士
［専門分野］　化学
［略　歴］
1973年　シカゴ大学教授
1974年　カリフォルニア大学教授
1994年　台湾中央研究院院長
1986年　ノーベル化学賞受賞、米国科学メダル受賞
2003年　名古屋大学名誉博士

野依　良治 博士
理化学研究所理事長、名古屋大学特別教授
［専門分野］　化学
［略　歴］
1972年　名古屋大学教授
1997年　名古屋大学大学院理学研究科長
2000年　文化勲章受章
2001年　ノーベル化学賞受賞、ウルフ賞受賞
2003年　理化学研究所理事長

Rolf STÜRNER 博士
フライブルク大学教授、ハーバードロースクール客員教授
［専門分野］　民事訴訟法
［略　歴］
1976年　コンスタンツ大学教授
1981年　シュトゥットガルト・カールスルーエ高等裁判所判事
1993年　オーストリア・スイス・ドイツ民事訴訟法学会会長
2000年　フライブルク大学法学部長
2001年　ハーバードロースクール客員教授

Michel ZINK 博士
コレージュ・ド・フランス副学長
［専門分野］　文学
［略　歴］
1964年　パリ高等師範学校入学
1976年　トゥールーズ大学教授
1987年　パリ第４大学教授
1994年　コレージュ・ド・フランス教授
2000年　フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス副学長

高等研究院の研究活動の説明

平成18年度名古屋大学入学試験を実施

平成18年度名古屋大学入学試験（個別学力検査）の前期日程が、２月25日（土）、東山地区及び大幸地区で行われ、1,462名の募集人員に対し、4,465名が受験しました。

試験当日は、晴天に恵まれ、受験生が午前７時すぎから会場に集まり始め、参考書やノートで最終確認をしたり、友人と話をしたりしながら、本番に備えていました。また、受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験生を親切に案内する職員や学生の姿がキャンパスのあちらこちらで見られました。

午前９時から外国語の試験が９学部で一斉に始まり、受験生は真剣な表情で問題に取り組んでいました。また、平野総長と豊田理事・事務局長が、各試験場を訪れ、試験場主任や教職員を激励しました。各学部の試験は午後５時30分にはすべて終了し、受験生は、お互いに試験問題について話し合ったりしながら、家路に着きました。

また、前期日程試験の合格発表が、３月９日（木）正午から、豊田講堂前庭で、後期日程試験が、３月13日（月）、東山地区、鶴舞地区及び大幸地区で行われました。なお、後期日程試験の合格発表は、３月22日（水）正午から、豊田講堂前庭で行われます。

試験会場の様子

第７回経営協議会を開催

第７回経営協議会が、２月19日（日）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、平成18年度予算、平成18事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画、中期目標･中期計画の変更（総人件費改革）、財政計画、名古屋大学基金、目的積立金の配分、平成17年度経営状況の報告について、各担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

続いて、部局ヒヤリング、名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボードの開催、理事等の交代及び次期経営協議会委員について、総長及び担当理事から説明が行われました。

外部委員からは、各議題について、大所高所から貴重な意見が多数寄せられました。

なお、今年度は、３月26日に第８回経営協議会の開催を予定しています。

経営協議会の様子

ニュース

平成18年度アジア・アフリカ学術基盤形成事業に採用される

－地域特性にもとづく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携－

平成18年度アジア・アフリカ学術基盤形成事業に、本学から申請した「地域特性にもとづく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携」（日本側コーディネーター：海津正倫環境学研究科教授）が採用されました。

この事業は、アジア・アフリカ地域における諸課題の解決に資するため、日本の研究機関が主導的役割を果たし、アジア・アフリカ諸国の研究拠点機関と持続的な協力関係を構築し、当該分野に関する中核的研究拠点の構築や若手研究者の育成を目指して、独立行政法人日本学術振興会が平成17年度より実施しているものです。

平成18年度は、62件の申請があり、そのうち、本学の１件を含む５件の研究交流課題が採用されました。

「地域特性にもとづく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携」

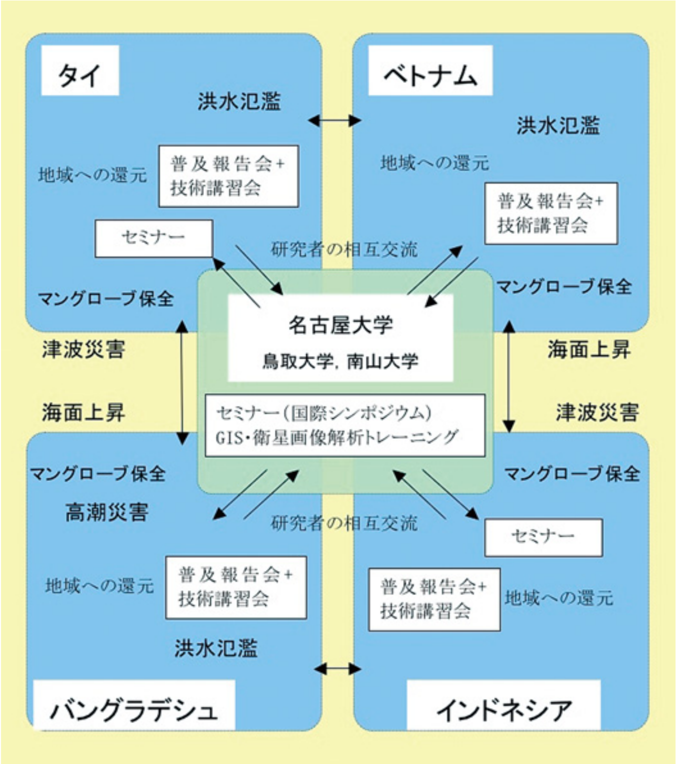
［日本側拠点機関・コーディネーター］

大学院環境学研究科・海津正倫教授

［研究概要］

本研究は、近年著しい地域変容を示している東南アジア臨海域における自然災害や、温暖化によって懸念されている海面上昇の影響を軽減するために、それぞれの地域特性を考慮しながら、対象国・地域との連携のもとに、軽減の方策を導こうとするものです。本研究には、タイ、ベトナム、バングラデシュ、インドネシアの４か国から本学と協定を持つ大学・機関や AC21メンバー校が参加し、将来的には、本研究実績をもとにした実践的な研究継続の実施及び相互の研究交流の継続、また、各機関の連携の緊密化などが期待されます。

［研究協力体制の概念図］



平成18年度アジア研究教育拠点事業に採用される

－材料電磁プロセシングの世界拠点の構築－

平成18年度アジア研究教育拠点事業に、本学から申請した「材料電磁プロセシングの世界拠点の構築」（日本側コーディネーター：浅井滋生工学研究科教授）が採用されました。

この事業は、アジア諸国の研究教育拠点機関と持続的な協力関係を確立し、世界的水準の研究拠点を構築するとともに、次世代の中核を担う若手研究者を養成することを目的として、独立行政法人日本学術振興会が平成17年度より実施しているものです。

平成18年度は、47件の申請があり、そのうち本学の１件を含む３件の研究交流課題が採用されました。

なお、本学は、平成17年度も同事業に、「アジア法整備支援のための実務・研究融合型比較法研究拠点」（日本側コーディネーター：市橋克哉法学研究科教授）、「アジアの最先端有機化学」（日本側コーディネーター：磯部　稔生命農学研究科教授）の２件が採択されています。

「材料電磁プロセシングの世界拠点の構築」

［日本側拠点機関・コーディネーター］

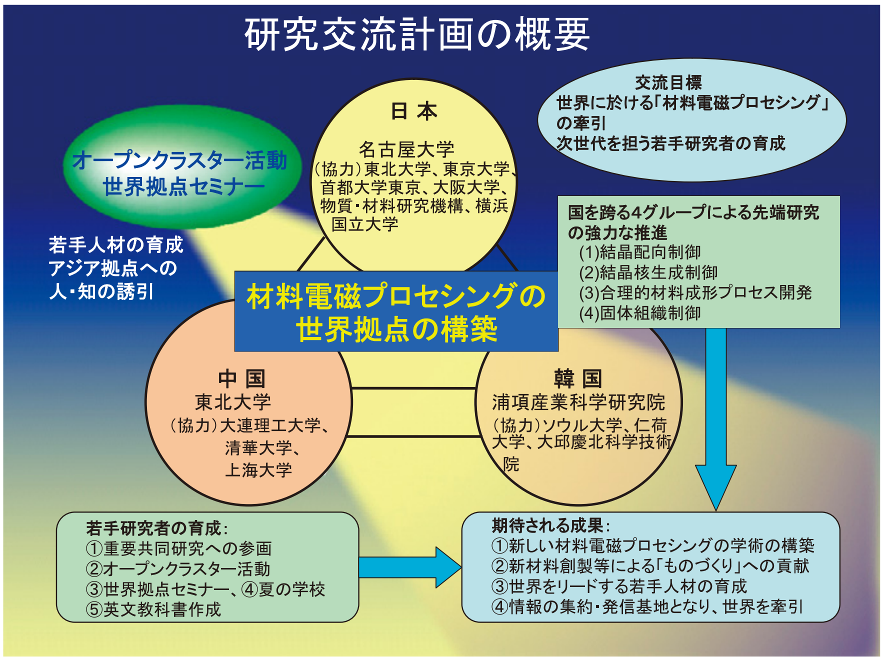
大学院工学研究科・浅井滋生教授

［研究概要］

「材料電磁プロセシング」とは、電場・磁場の機能を活用して、新規の機能を持つ材料の創製及び材料の合理的な製造プロセスの開発に関わる新しい科学・技術分野で、我が国の材料関係の学会を母胎として1980年代に誕生したものです。近年、超電導技術の著しい発展に伴って強磁場が比較的容易に得られる環境が整いつつありますが、この強磁場を用いることにより、有機、無機材料を問わず、結晶方位制御が可能となるため、材料の飛躍的機能向上が期待できます。そのため、この分野は、「強磁場の材料科学」として最近、大きな注目を集めるようになっています。

これまで、本分野は日本とフランスが世界の牽引役を務めてきましたが、近年の中国、韓国の著しい経済発展に伴い、今後“ものづくり”の拠点が欧米から東アジア（日本、中国、韓国）に移行する兆しがみられます。この点を踏まえて、「強磁場の材料科学」を包含した「材料電磁プロセシング」の学術・技術の再構築と次世代を担う若手研究者の育成を図ることを目的に、名古屋大学に本分野の世界的研究拠点を形成せんとするものです。

［将来構想の概念図］



名古屋大学マネジメントセミナーを開催

名古屋大学マネジメントセミナーが、１月11日（水）、２月10日（金）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。

このセミナーは、本学職員のさらなる意識改革と改革意欲の醸成、法人経営等に資する専門的知識の収集等を目的として開催されているもので、理事や管理職員を中心に、延べ200名の参加がありました。

第２回マネジメントセミナーの様子

第１回では、新日鐵本社総務部で約14年間、経営・組織改革を担当した後、筑波大学で法人化を機にした大学改革の企画・推進を担当している吉武博通筑波大学学長特別補佐が、「大学の組織・業務戦略について～企業と大学の改革実務経験を踏まえ～」と題して講演しました。

第２回では、監査論及び会計学が専門の河合秀俊豊橋技術科学大学監事が、「監事の職責と監査室の役割について～監査の視点からの業務の見直し～」と題して講演しました。国立大学法人は、財務報告の信頼性の確保、業務運営の有効性と効率性、法令・法規の遵守及び総長の大学運営方針に則して、適切に業務が進められているかについて内部監査を実施し、自己管理体制の充実を図ることが求められており、本学でも監査室の設置について検討を進めていることから、今回は、監査室の役割について職員の認識を深めるために、このテーマで行われました。

参加者は、セミナーを通じて、国立大学法人を取り巻く厳しい環境の中、職員一人一人が取り組むべき課題、職員各自の意識改革の必要性及び内部監査の必要性について、理解を深めることができました。

体育課外活動施設の寄贈者に感謝状を贈呈

体育課外活動施設の寄贈者に対する感謝状贈呈式が、２月13日（月）、本部１号館第２会議室において行われ、名古屋大学漕艇部艇友会及び同会会員の木村洋一、新井直子、大橋武昭、加藤治朗、田島正孝、坪井　彰、渡辺元雄の各氏と、㈱メッドインフォマティックス代表取締役の磯部佳子氏に、感謝状が贈呈されました。

感謝状贈呈式の様子

漕艇部のOB・OG会である艇友会からは、本学に多くの寄附金をいただいており、これを元に、昨年４月にボート艇庫兼合宿所を中川区の既設合宿所隣りに増築するとともに、ボートも購入しています。今回は、艇友会と、同会会員のうち、100万円以上の寄附金をいただいた７名の方々に感謝状を贈呈しました。

また、磯部氏からは、ボクシング部OBの岩尾　智愛知医科大学講師との親交を通じ、東山キャンパスにボクシング部練習場（昨年11月完成）を寄贈していただきました。

式典では、総長から、一人一人に感謝状及び記念品が贈呈されるとともに、ご厚志が本学の課外活動の一層の充実と発展に大きく寄与する旨の謝意が述べられました。その後の懇談では、被贈呈者から建設の苦労話等が披露され、また、総長からは、今後も本学の課外活動に対し指導、助言いただきたい旨のあいさつがありました。

施設の充実が図られたことにより、両クラブの今後の活躍が一層期待されます。

IB 電子情報館が名古屋市都市景観賞を受賞

「名古屋大学の建物と地下鉄出入口（IB 電子情報館）」が、平成17年度まちなみ部門名古屋市都市景観賞を受賞しました。

この賞は、「個性豊かな、誇りと愛着のもてるまち」を目指して、名古屋のまちの優れた都市景観を表彰する制度として、昭和59年度から始まったもので、今年度で21回目となります。20年を区切りとして昨年度は行われず、今年度から新たに、「まちなみ部門」と「まちづくり部門」の２部門構成となりました。まちなみ部門では、市民投票等も行い、厳正な審査の結果、５件の建物等が、まちづくり部門では、まちづくりに寄与する市民活動の中から４件の活動等が選ばれ、まちなみ部門都市景観賞として、「名古屋大学の建物と地下鉄出入口（IB 電子情報館）」が選ばれました。

松原名古屋市長から表彰状を受け取る谷口施設計画推進室長

表彰式は、１月31日（火）、名古屋都市センターで行われ、建築主として本学、設計者として本学施設計画推進室、本学施設管理部、（Ⅰ期）㈱石本建築事務所名古屋支所、（Ⅱ期）㈱教育施設研究所大阪事務所、施工者として（Ⅰ期）戸田・淺沼・中村特定建設工事共同企業体、（Ⅱ期）戸田・矢作・石田特定建設工事共同企業体がそれぞれ表彰されました。式には、本学から、谷口施設計画推進室長等が出席し、松原名古屋市長による表彰状・銘板の贈呈及びあいさつ、選考委員長による選考総評に続いて、谷口室長が受賞作品を紹介しました。

第２回女子学生エンカレッジセミナーを開催

男女共同参画推進専門委員会及び男女共同参画室は、１月13日（金）、IB 電子情報館大講義室において、第２回女子学生エンカレッジセミナーを開催しました。

このセミナーは、理工系及びその他の特に女性の少ない分野への女性の参画を奨励する女子学生支援策の一環として、昨年度から開催されているもので、第１回は、ベテラン及び若手を含む５名の女性研究者を招いて行われました。

講演の様子

今回は、企業や大学で研究者又は技術者として活躍中の本学理学部・大学院理学研究科及び大学院工学研究科の卒業生・修了生４名が、自分の仕事、学生へのメッセージ等を語り、参加した約60名の女子学生等は熱心に耳を傾けていました。その後の講師を交えた懇親会では、研究、家庭との両立、就職等について、講師に熱心に質問する女子学生の姿が見られるとともに、参加した女子学生同士の意見交換も活発に行われ、各々の研究室の環境について情報を交換する場としても有意義なものとなりました。

国際貿易理論の２つの研究：
公共財のある場合の貿易利益の問題と戦略的貿易政策の内生的タイミングの問題

多和田　眞　大学院経済学研究科教授／高等研究院教授

国際貿易の理論的研究の中心的なテーマに国際貿易は貿易国に利益をもたらすかどうかという貿易利益の問題があります。1940年代から60年代にかけての数理経済学の発展のもとで、国際貿易の理論的研究も新古典派的な一般均衡論のフレームワークの中で、活発に行われました。新古典派的な経済、すなわち消費者の選好や生産者の技術が効用最大化問題や利潤最大化問題の最適解の存在を内点解として保障するような理想的な性質を持っている経済（これを凸性が仮定されている経済という）において、サミュエルソンやケンプ等の当時の最先端の経済学者が分析を行い、貿易利益に関しては自由貿易によっていずれの国も利益を得るという、アダム・スミスの命題が成立することを厳密な形で証明しました。

この新古典派の世界には、いくつかの厳しい前提があります。既に述べたように生産技術の凸性（生産可能性集合の凸性（図１参照））によって、規模の経済が働かないことを前提としています。したがって市場は多数の企業の間での完全競争状態を前提とし、さらには公害に代表される外部経済や警察、消防などに代表される公共財など市場の失敗を引き起こす要因を排除した経済となっています。こうした前提条件をはずして、より現実の経済に即したモデルによって、上述の問題を検討することが次の研究課題となりました。

1980年代に私は公共財を導入した一般均衡モデルによって貿易のパターンや貿易利益について分析し、いくつかの専門誌にその成果を発表してきましたが、そこでの分析は小国モデル（当該国の経済行動は他国に影響を与えないというモデル）の分析にとどまっていました。最近、このモデルを２国モデル（２つの国の経済行動がお互いに影響し合うモデル）に拡張して分析を行うことによって、貿易後も全ての財を生産するような国（いわゆる不完全特化国）は貿易によって損失を被るという非常に興味ある結果を得ました。このような結果が生じる要因の１つは生産可能性集合が図２に示されるように非凸となるた

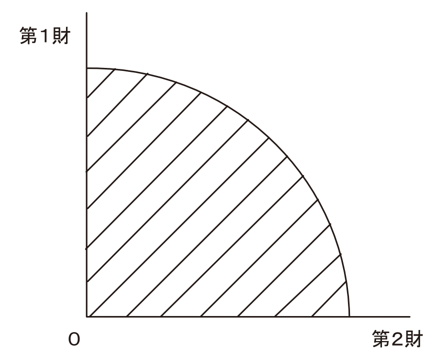


図１　通常の生産可能性集合

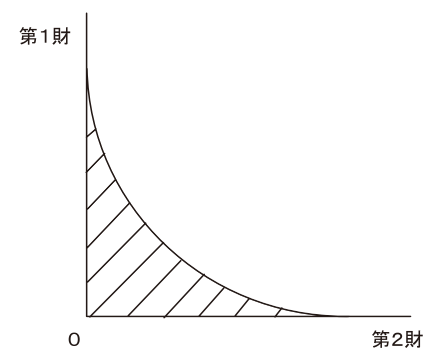


図２　公共財がある場合の生産可能性集合

めです。この論文を国際学会で報告したところ、K.Y. Wong や J. Markusen はこのような経済で貿易後に不完全特化となる国が存在しうるのかという点でこの結果に懐疑的でしたが、M.C. Kemp や N.V. Long は好意的でした。世界市場における需給均衡条件によって、不完全特化国の存在を示すことで、結果的に国際経済学の専門誌 Review of International Economics に掲載が受理されました。

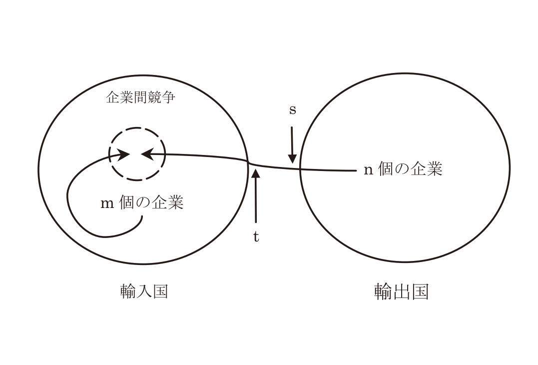


図３　戦略的貿易政策モデル１

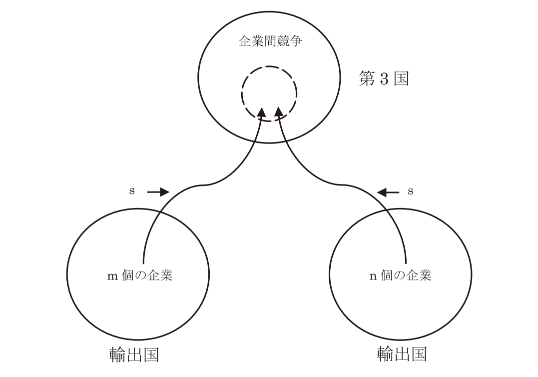


図４　戦略的貿易政策モデル２

　最近取り組んでいるもう１つのテーマは、ゲーム論をベースとした戦略的貿易政策における政府の政策提示のタイミングの問題です。例えば図３で示されるような互いに貿易をする２国間で輸入国が関税 t を課すから、輸出国が対抗措置として輸出補助金 s を導入するのか、その逆に補助金を出すから、それへの報復として関税を課すのかという問題です。ゲーム論を用いたこのような問題は前提条件が少し変わると、結果が大きく変わることがよくあります。最近完成した論文で、政策のタイミングは輸出国の企業数と輸入国の企業数の差に依存し、企業数の大きい方の国の政府が先に動くという結果を示しました。しかし、２つの国がともに輸出国で第３国市場に輸出競争をしている場合（図４）には、企業数の小さい方の国の政府が輸出補助金の導入を先に行うという逆の結果が得られることを数年前に証明しています。したがって、政策決定のタイミングがどのようなメカニズムにもとづいているのかを説得的に説明することに現在取り組んでいます。

1948年愛知県に生まれる。1980年 New South Wales 大学大学院終了、81年同大学 Ph.D in Econ. 取得、80～81年東京都立大学助手、81～84年神戸商科大学（現兵庫県立大学）講師、助教授、84～99年名古屋市立大学助教授、教授、99年に名古屋大学教授となり、現在に至る。専門はミクロ経済理論、国際貿易理論。
趣味：以前はテニスとギターでしたが、今は時間のあるときAgatha Christie, Erle S. Gardner, Raymond Chandler, Dashiell Hammett のミステリーを読むことです。
好きなことば：特にありません。これを機会に考えてみたところ、留学生時代に読んだ、Chandler の「Playback」の中での “If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.” ということばが印象に残っています。

たわだ　まこと

都市にまつわる不思議を考える

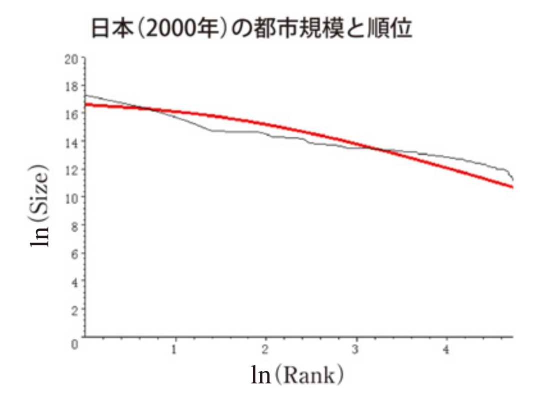
佐藤　泰裕　大学院環境学研究科助教授

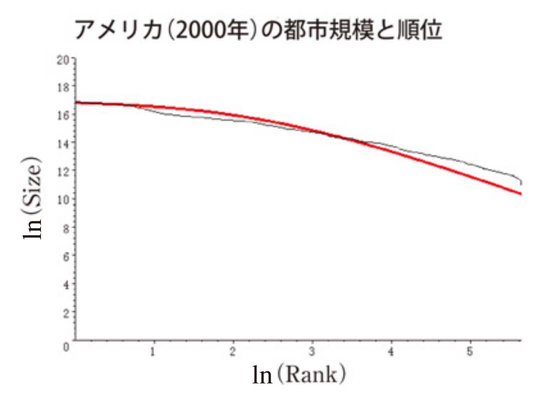
2000年の国勢調査によると、東京都、大阪府、愛知県の人口はそれぞれ約1200万、880万、700万人でした。この３都府県だけで日本全国の人口の２割以上を占めています。更に、通勤や通学といった、日常的な人の流れで繋がっている市区町村を一まとめにした「都市圏」でみると、東京、大阪、名古屋大都市圏がそれぞれ3170万、1200万、530万人の人口を抱え、この三大都市圏で日本全国の４割近い人口を占めます。

こうした大都市がなぜ発生するのか、そして、他の規模の都市との関係はどうなっているのか、について、長年、様々な分野の研究者により分析が行われてきました。その基本的なものとして、都市規模の分布がどうなっていて、それがどういうメカニズムで発生するのか、についての分析があります。特に、都市をその規模により順位付けし、順位と規模の間の関係を探る研究が一時期盛んに行われました。その当初検証された仮説は、「都市の順位×都市の規模」がどの都市についても同じ値になる、というものでした。この仮説はランク・サイズ・ルールと呼ばれ、いくつかの実証研究でこのルールの成立が支持されました。これは非常にシンプルで不思議な仮説でしたので、それを支持する結果は研究者の興味をひきつけました。その後の研究により、ここまでシンプルな関係は多くの場合成り立っていないことが明らかになりましたが、都市の規模と順位の関係は、その後も理論、実証両面から分析が行われています。

最近の私の研究の一つが、転職や就職に関わる人口移動の観点から、都市規模分布を説明できないか、というものです。学生の頃に「就職は運と縁だ」という話を様々な人から聞きましたが、この、「偶然」という要素を、簡単な確率モデルを使って表現し、「たまたま転職や就職のチャンスが巡ってきて、それが良いものであれば利用する」という行動原理から人の移動が発生し、その積み重ねの結果、都市規模分布が決まる、というモデルを考えています。まだ非常にプリミティブなモデルですが、それでも、ある程度は実際の都市規模分布を再現できることが分かっています。

このように、人口集中や都市化がなぜ発生し、都市規模がどう決まるのか、そして、そのもとで何が起き、何が問題になるかを研究しています。また、都市の規模により、所得水準や失業率などの面でどのような違いが観察され、その原因をどう考えればよいのか、についても分析を行っています。





大都市圏の規模と順位の関係を、上図は日本について、下図はアメリカについてプロットしています。横軸は順位（の自然対数）、縦軸は規模（の自然対数）を表します。黒い線が実際の値、赤い線がモデルから得られた理論値です。

オフタイム

ちょっと、劇場へ

大学院文学研究科長・文学部長
杉山　寛行

好きな芝居のパンフレットを手にして

近頃お気に入りの DVD など

育ったのは小さな町だったが、映画館は五館もあった。映画は全盛期だったし、何よりも毛織物景気で、町には集団就職の「女工さん」が溢れていた。

小学校から帰ると、母が、映画に行くから用意して、父が帰る前には戻ってくるんだから、と言い、首尾よく帰宅するや、父が突然映画に行く、と言い始める。聞いてみると、今まで見ていた映画。母に目をやると、知らんふり。そこで一家であらためて同じ映画を見物する。そんなことが、子供の頃にはしばしばあった。親が見に行く映画はもっぱら大映か松竹映画で、『夜の河』だの『夜の蝶』だのまったく子供向きではなかった。それでも物語の記憶はかすかにあり、また大映映画の美しさもはっきりこころに残っている（松竹に比べ大映の技術の水準が遙かに高かったことを後に知った）。週末には一人で東映の封切館へ。何しろ当時の時代劇は連続もので、主人公がピンチに陥った瞬間前編終わりとなり、次週には必ず後編を見に行かなければならなかった。

学校には映画鑑賞という授業もあり、そこでは映画は娯楽ではなく教育の一環だった。『しいのみ学園』（近年再評価されている清水宏監督作品。主題歌は今でも歌うことができる）や『僕の村は戦場だった』（A・タルコフスキイ監督。ソ連製の反戦映画というので先生が選んだに違いない）の感想文を書いた記憶がある。

そんなこんなで、若いときから時間があれば、映画を見ることが習慣となった。ジャンルを問わず見るし、同じ映画を繰り返し見る。処女作から遺作まで同時代人として見続けた監督もいるし、見続けること現在進行中の映像作家もいる。

母方の祖父母は孫を連れてゆくというのが口実だったし、こちらは帰りのレストランでの食事に目がくらんでいたから、小さいときから歌舞伎見物にはよくお供をした。一人で芝居に出かけるようになったのは大学生になってから。振り返ってみると、60年代から80年代は、現代演劇の観客にとってはまことに幸福な時代だった。新しい才能が次々と現れたし、旧来の演劇のかたちを打ち破る野心的な試みにも立ち会うことができた。ただ名古屋で上演されることはほとんどなく、東京まで出かけなければならなかった。折角だからというので、創刊されたばかりの『ぴあ』を頼りに、何本もはしごをして見て回っているうちに、偶然にまた新しい作家や劇団と出会うことになり、その後ずっと見続けることになったりもした。金森馨氏の装置や吉井澄雄氏の照明の美しさは今でも思い出される。論文が思うように書けず悩んでいた時、ちょうど出会った芝居の構造に、論文の展開上のヒントをえて、救われたこともある。

二十年ほど前、名古屋でパリ・オペラ座バレー団の公演があった。バレーには格別馴染みがあるというのではなかったが、パトリック・デュポンが踊るというので心が動いたのだった。ところが当日彼は代演となり、20歳そこそこの女性のエトワールが「ボレロ」を踊るという。ひどく落胆したけれど、舞台にスポットライトが当たり、指先だけが現れて微妙に動き始めた瞬間から、経験したことのないような興奮に魂が揺さぶられることになった。それがシルヴィ・ギエムを最初に見た瞬間だった。

思いもかけない時に至福の瞬間は訪れる、そんな想いでいつも時間のある時には劇場に出かけたい、と思っている。もっとも近頃では、出かけたい、としか言えないのがちょっと無念で、映画はDVD 鑑賞を余儀なくされているのがもっと悲しい。

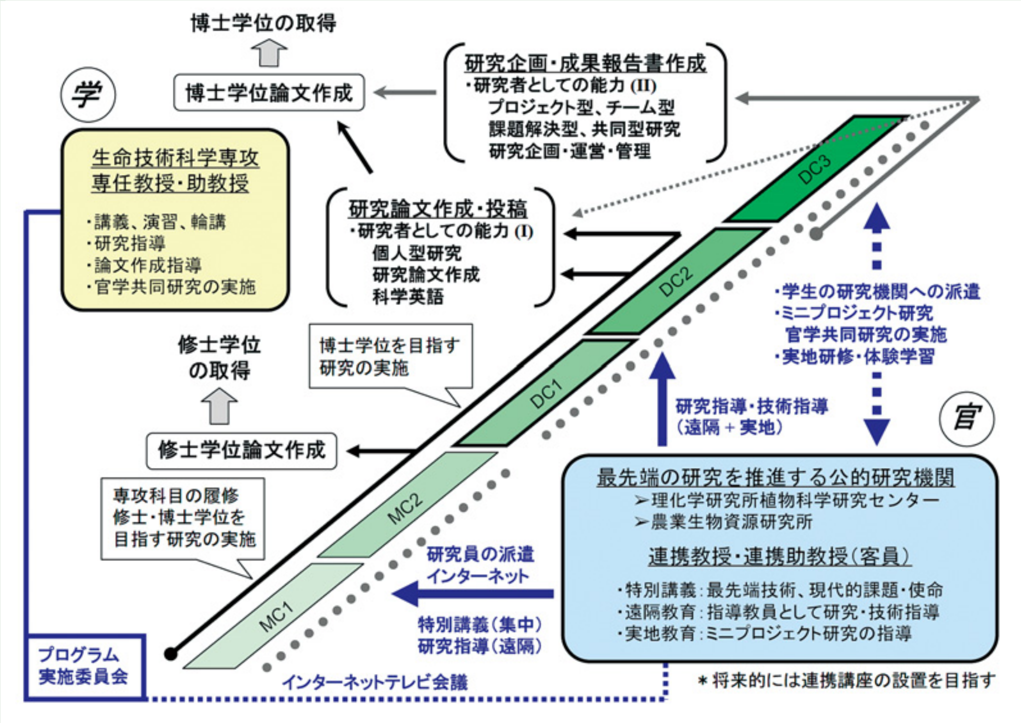
官学連携による生命技術科学教育の推進

柘植　尚志　大学院生命農学研究科教授 / 大学院生命農学研究科生命技術科学専攻長

このたび、名古屋大学大学院生命農学研究科・生命技術科学専攻は、文部科学省の「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択されました。「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、「現代社会の新たなニーズに応えられる独創性豊な若手研究者の養成機能の強化を図るために、大学院における意欲的かつ独創的な教育取組みを支援する。」という趣旨で本年度からはじまった事業です。ここでは、採択された「官学連携による生命技術科学教育の推進」の概要について紹介します。

生命農学研究科では、これまで個人研究や課題発掘型研究を通して、主に大学教員などアカデミア後継者の育成を目指した大学院教育を実施し、多くの人材を輩出してきました。一方、食糧・環境問題など農学系分野が取り組むべき大きな課題が顕在化する中、これらの解決に向けた研究者・

官学連携教育プログラムの実施計画：遠隔教育と学生派遣



技術者の育成に対する社会的要求が高まってきています。このような時代の要請に応えるために、生命農学研究科では、農学領域での実践的な技術を科学的に裏付けつつ技術開発に繋げていくための教育・研究を実施する新しい専攻として、「生命技術科学専攻」を平成16年度に設置しました。本専攻では、食糧経済、技術倫理などの人文社会科学的知識を身につけた、課題解決型研究や目的指向型研究を推進できる専門技術者・研究者・指導者の養成を教育目標としています。

食糧・環境問題など人類が地球規模で取り組むべき課題を解決していくためには、個人の高度な専門的知識、技術、思考能力だけでなく、それらを結集したプロジェクト型・チーム型研究を推進する必要があり、そのためのリーダーの育成が求められています。そこで、「魅力ある大学院教育」イニシアティブでは、専門的知識や技術の修得、思考能力の育成といった従来の大学院教育の目標に加え、「プロジェクト型・チーム型研究を企画・調整し、運営・管理する能力」を養成することを新たな目標に掲げ、その実現のために官学連携教育プログラムを提案しました。本プログラムでは、目的指向型プロジェクト研究を実施している公的研究機関との密接な連携・協力（官学連携）によって、大学院生にプロジェクト型・チーム型研究を実地体験する教育機会を提供します。

これまでの共同研究実績に基づき、理化学研究所植物科学研究センターと農業生物資源研究所を連携機関として選定しました。具体的には、①連携機関から客員教員を採用し、大学では整備できない大型設備や最先端技術を活用した教育と研究指導を実施します。②インターネットテレビ会議システムによって遠隔教育・遠隔会議を実施し、密接な連携による組織的教育研究を強化します。③プロジェクト型・チーム型研究の企画・運営・管理を臨場感を持って体験する機会として、連携機関に学生を派遣し、共同プロジェクトを実施します。このように教育研究活動の多様化を図ることによって、新しい方向での人材育成の効果を期待しています。

本年度は、両連携機関から５名の客員教員を採用し、本専攻の教員とともにプログラム実施委員会を立ち上げました。昨年12月には大学院生と大学院進学予定者を対象とした本プログラムの説明会と客員教員による各研究機関の紹介・セミナーを開催するとともに、集中講義を開講しました。すでに、短期学生派遣も開始しており、次年度に向けて本格的な準備を進めています。

本教育プログラムは、理化学研究所植物科学研究センターと農業生物資源研究所を連携機関として開始しましたが、将来的には、連携相手となる公的機関を拡大し、多様な社会的ニーズと学生の指向にあわせた、より充実した厚みのある生命農学研究科教育プログラムの実施を目指しています。

1959年岐阜県生まれ
1987年名古屋大学大学院農学研究科修了　農学博士
名古屋大学農学部助手、同助教授を経て、2004年４月から現職
専門は植物病理学

つげ　たかし

同窓生から

プラネタリウムから広がる世界

名古屋市科学館学芸員
毛利　勝廣

ZEISS Ⅳ型プラネタリウムが再現する星空　名古屋市科学館プラネタリウム

名古屋市科学館プラネタリウムは、1962年の開館以来1400万人もの見学者を迎えています。毎回、学芸員が生解説し、その際に使用する映像なども全て自作です。購入した「番組」を流す施設が多い中、手作りの魅力からか、ここ10年で日本一の見学者を誇っています。自分を含めて６名の学芸員が、内容の企画、調査、制作そして解説を行なっています。

パリのシャンゼリゼ通りの近くに「発見の宮殿」（Palais de la Découverte）という歴史ある科学館があります。1937年に開館したこの科学館は、パリ万博の建物を活用した、まさに科学の「宮殿」です。2000年にパリを訪問した松原名古屋市長がパリ市長に科学・美術分野の交流を提案し、2003年に名古屋市科学館と発見の宮殿との交流計画に調印がなされました。そして2005年３月２日、日本語による「日本のプラネタリウム」をパリで行ないました。日本人初の公式海外解説です。第一回の解説者は日本プラネタリウム協会会長の北原政子天文主幹（当時）。サポートスタッフとして走り回ったその記憶もさめない第二回の2006年１月25日。今度はその解説を担当させていただきました。

プラネタリウムのメインテーマは「月」。日本独自の文化や宇宙観を示すのに最も適しているからです。まずは美しい夕暮れ、そして名古屋とパリとの星空の違い、ため息の出るような満天の星と天の川。さらに特殊投影機を持ち込んでの月の満ち欠けの再現、実写映像を交えた月面の科学解説。そして日本人の感覚だからこそ生まれた、世界に誇るべきストーリー「竹取物語」。

当日は120名ほどの見学者があり発見の宮殿ドームはほぼ満席。授業としてきた日本人学校の生徒に加えて、その約３倍もの人数の大人の方が見に来られました。宇宙や天文への興味に大人や子どもの区別はありません。だからこそ、わかりやすさだけに流されない、きちんとした科学性のある解説をしていきたいと思っています。その意味で卒業後も、名古屋大学はとても大切な存在です。

人的なつながりはもちろんのこと、理学研究科とは公開セミナー「天文学の最前線」や坂田・早川記念レクチャー、名大博物館とは天体望遠鏡の使い方教室など、共催による事業を行なっています。さらに情報科学研究科とは、天文現象の可視化など情報技術の天文教育への応用を行なっており、個人的にも博士の学位を取得するため研究を進めています。そして職場の天文係は６名中３名が名古屋大学出身です（野田学天文係長、小林修二学芸員。いずれも理学研究科出身）。名古屋大学で学んだ事や進行中の研究を教育現場に活かす日々はこれからも続きます。

名古屋市科学館のプラネタリウムは大人の割合が６割以上というのも大きな特徴です。子どものためだけでなく、ぜひご自身の楽しみとしてお越し下さると幸いです。

パリ発見の宮殿プラネタリウムの解説台にて
右が筆者、左は発見の宮殿の Julien Le Bonheur 氏

もうり　かつひろ
1964年２月５日、名古屋市生まれ。1988年名古屋大学理学研究科地球科学専攻修了。㈱NTT データを経て1990年より現職。2002年人間情報学研究科博士後期課程満期退学。
プラネタリウムでの解説、映像等の制作、天文事業に関する企画運営を行う。天文現象の CG による可視化、光害の実態調査、オーロラなどの専門分野を持つ。第36回科学技術映像祭・科学技術庁長官賞受賞、教育システム情報学会・第４回論文賞受賞。
名古屋市科学館学芸員、愛知教育大学非常勤講師、日本天文学会教育委員、日本プラネタリウム協会総務。

消える!?アマゾンの危機 ～木を使うことが森を守る～

大学院生命農学研究科生物圏資源学専攻博士課程前期課程２年
鈴木　理恵

アマゾンには目を見張る生命体がたくさん！

遺伝子資源の宝庫とも言われる南米アマゾンは世界最大の面積を誇る熱帯林で、地球上の生物の約３分の１がこのアマゾンに生息しているといわれています。

近年、このアマゾン熱帯林の消失面積は加速しており、この減少速度が続けば、なんと約300年後にはアマゾンの姿は消えてしまうかもしれないというほどです。しかしこれはあくまで単純計算にすぎず、現実には最近増えつつある植林等で森林自体がなくなることはないでしょうが、単一樹種で構成された森林では生物多様性を維持することは不可能です。一刻も早く天然林が失われる現状を打開しなければいけません。

私は2004年９月から約１年間、修士論文の研究の一環として４回にわたってブラジルアマゾン（マトグロッソ州）へ行く機会を得ました。そこで見たものは、想像を絶する大自然と目に見えるほどのスピードで失われていく森林の様子でした。実際に、2003－2004年の１年間におけるアマゾンの森林消失面積は、ブラジル史上２番目に深刻な26,130km^2（愛知県約５個分相当）で、そのうちの48％はマトグロッソ州の森林だったと連邦政府が発表しています。こういった状況がなぜ起こるのでしょうか。それはそこに人々の生活があるからです。都市で職がない人々は未開発の土地へ移り、天然林を伐採後、放牧地や大豆畑などの農耕地へと転換し、作物が育たなくなるとその土地を捨て次の土地へ、といった状況が繰り返されています。

現在、名古屋大学大学院生命農学研究科の福島和彦教授（森林化学研究分野）およびブラジル・マトグロッソ連邦大学の José Manoel Henriques de Jesus 教授らを筆頭に共同プロジェクトが始動されつつあります。このプロジェクトは、アマゾンにおける持続的森林経営モデルの確立を目的としており、従来の「木材伐採＝環境破壊」「木材を使わない＝森林保護」といった概念ではなく、逆に木材の利用価値を上げることで樹木への意識を高めることを狙いとし、地球環境と人間の経済活動の両立を目指そうというものです。森林が失われた土地を再生するだけでなく、現地の人々の生活基盤となる森林経営を確立するため、農学分野のみならず、薬学、工学、社会経済に至る各研究分野が一丸となって、この課題に取り組む必要があります。そしていつかこのプロジェクトが実を結び、貴重な熱帯雨林の減少に歯止めをかけ、人間の豊かな暮らしと共に時を過ごす光景が見られることを願うべく、博士後期課程に進学し今後の研究活動に力を注いでいきたいと思っています。

ブラジルの子供達との楽しいひと時

学生の元気

舞台の上の開発誌

大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士課程後期課程３年
前田　直人

舞台は広い。そして眩いばかりの可能性に溢れている。私は高校時代から芝居を始め、大学でも新しく劇団を旗揚げした。学生生活の多くが舞台とともにあったといってもいい。けれど、まさか大学院でも劇団を旗揚げすることになるとは思いもよらなかった。ちょうど今から５年前、2001年のことだ。

私が所属する国際開発研究科では、世界に広がる貧困、環境破壊、紛争や難民、異文化理解などがさかんに取り上げられ、これからの開発援助や国際協力のあり方について日夜研究が行われている。その中でも多くの院生がフィールドワークに基づいた研究を重視していることは大きな特徴だ。私自身も中国西南部の少数民族社会を繰り返し訪ね、それを論文や研究発表という形にしてきた。しかし一方で、この身体で経験してきたフィールドワークのすべてが「発表」されることはなかった。文字によっては表現しえない身体的な経験が私を舞台へと駆り立てたのだ。私が「開発のための劇団七楽社（ならくしゃ）」を立ち上げたのはこうした経緯からである。

演出をつける筆者（正面）

団員はすべて国内外の開発・協力分野で活躍している研究科の院生によって担われ、私が脚本と演出を手がけた。けれど、脚本は私ひとりの体験談ではない。七楽社の脚本はいつでもフィールドワークを経験した団員たちとの共同作業によって書き起こされてきた。私自身、あるいは団員である仲間たちが開発の現場で得た経験はこの過程を経て舞台化され、それまで語られてきた「開発」の書き換えを迫ろうとするのだ。

これまでの５年間で計６度の公演を重ね、観客動員は600名を超えた。ここ数回の公演では研究科内の教員や院生のほか、他学部・他研究科、あるいは他大学や NGO 団体からの観客も増えている。しかし、私は観客に対して開発を叫んでいるのではない。舞台を介して、私たちや観客でさえも経験している開発の記憶を喚び覚ますことにこそあると考えているのだ。そこで開かれた身体は私たちに新しい開発の風景を見せてくれるのである。

練習風景（左端が筆者）

まえだ　なおと
1976年９月６日生まれ
京都府出身

医事課患者サービス掛の役割とは（苦情相談について）

医学部・医学系研究科医事課患者サービス掛主任
川瀬　敏子

医学部附属病院地域医療センター（医療福祉支援室）内にある医事課患者サービス掛は、その名のとおり患者サービス全般について、医師・看護師・MSW（医療ソーシャルワーカー）と協同して業務を行っています。

具体的には、「医療安全に係る相談窓口」（苦情相談窓口）を基本とし、機能評価・患者満足度委員会に関する事務、病院ボランティア関係事務、総合案内や予約センター業務も行っており、外来棟や病棟に設置した提案箱を介して寄せられる患者様等からの意見や提案について委員会で話し合い、その回答をモニターで周知するようなこともしています。

私が主に担当している苦情相談は、月平均20～25件程度にのぼり、相談とは云っても中味は様々であり、近年の傾向としては、医師の応対や診療内容などに対する苦情が一番多いように思います。

患者様によって言い回しは異なりますが、内容的には同じような相談であり、診療時の医師の応対や説明不足から不信感や不安な思いを抱かれ、それが苦情となり患者サービス掛にお見えになります。原因は、医師が行った説明を患者様が十分理解して頂いていない状態にあることや患者様の受け止め方にも様々な違いがあることに起因しているようです。

最近では、苦情にとどまらず医師の説明や治療方針に納得出来ないから医療費の支払いはしないと言われる方や、医師を代えてほしいと希望される患者様が増えており、対応に苦慮するケースもしばしばです。

このような相談があった場合は、担当医師から患者様に直接連絡してもらうよう依頼したり、次の来院時に詳細な説明をして頂くよう手配し理解を求めるようにしています。

なかには、医療安全管理部での検討や対応が必要なケースもあり、気の休まる暇がありません。

先生方も大勢の患者様を診察され大変なこととは思いますが、患者様とのコミュニケーションにも十分配慮し、病気の治療はもちろんですが、病気に対する不安な気持ちを少しでもやわらげたり、取り除いたりすることにも気を配っていただければと思います。

今後も、患者様と先生方が向き合って、より良い関係を築ける手助けが出来ればと思っています。

職場にて

かわせ　としこ
医学部附属病院地域医療センター（医療福祉支援室）兼務

11. 医学部附属病院　新中央診療棟（最終回）

キャンパスクローズアップ「新中央診療棟」最終回は、機械設備について紹介します。建物の機械設備は一般的に空気調和設備と給排水・衛生設備に分かれます。空気調和設備（以下:空調設備）は、主に建物内の温度、湿度、クリーン度などの調整を行う設備です。給排水・衛生設備（以下：衛生設備）とは給排水、消火、医療ガス、搬送（検体・薬・書類等を自動で運ぶ機械）等の設備を示します。

まず、空調設備ですが、新中央診療棟（以下：新中診）では各部屋の室温がベストコンディションに保たれるように冷水と温水を同時に供給し各部屋単位でミックスして最適な温度を設定、調整できるような４管式といわれる方式を採用しています。エネルギーセンターからの蒸気の供給を受け地下２階に設置した吸収式冷凍機により冷水を、熱交換器により温水を作り供給しています。

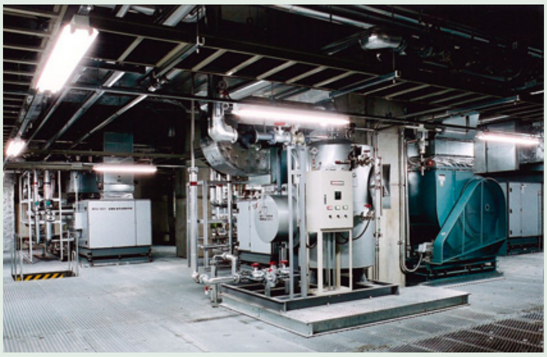
また、鶴舞地区はガスタービンによるコ・ジェネレーションシステム（熱併給発電システム）を採用しています。都市ガスにより電気と蒸気を作り、夜間の蒸気を無駄にしないように蓄熱槽を設け夜間熱を蓄え、昼その熱を放熱する事が可能なシステムにより、地球温暖化の大きな原因である CO_2 の排出量を大幅に削減しています。蓄熱槽は地下２階にあり建物のピット（床下空間）を利用していますので特別な建設費を必要としないような工夫をしています。各々の機器は複数台設置されていて故障時も熱源の供給が可能となっています。

次に、新中診で採用している省エネルギー対策について説明します。

① VWV 制御：新中診は、冷温水を絶えず必要としますので大きなポンプの搬送動力が必要です。可変流量可変圧力制御（VWV 制御）を採用することにより使用電力が削減でき、約50%（同システム病棟の検証値）の省エネになります。

② フロースマート制御：空調冷凍機用の冷却水ポンプは今までは定流量での運転が一般的でしたが、新中診では使用量により可変流量とできるようにしています。

③ 蓄熱槽：夜間の余剰蒸気の有効活用、また、余剰蒸気が無い場合でも昼間に蓄熱した熱を放熱することにより電気量を抑制すること



1
2 3 4

1　鶴舞キャンパス（中央が新中央診療棟）
2　手術室用機械室（６階）
3　熱源機械室（地下２階）
4　台数制御＆可変流量・可変圧力（VWV）制御の比較

ができ基本電気量契約を抑えることができます。

④　BEMS 制御：前日の外気温度に基づく蓄熱運転を学習し、当日の蓄熱運転を何時から開始するか判断し自動運転します。最低１年間の学習期間の後、鶴舞地区全体（各建物ごと）の電気、蒸気、給水、都市ガスの計量をし、検証をすることができますので無駄を避けることが可能です。

⑤　手術室の省エネ運転：環境支援システムとの連動により数分間無人になるとセンサーが感知しインバーター制御によるクリーンファンユニットの回転数を少なくするシステムです。クリーン度を保ちながら省エネを行います。

⑥　夜間の外気冷房：外気導入用空調機は、エネルギーセンターのスケジュールタイマーにより夜間は熱源の供給を遮断でき室温より低い外気を導入し建物を少しでも冷却できるようになっています。

続いて、衛生設備について説明します。給水は、市水（名古屋市上下水道局供給水）と井水系統に分かれています。井水は市水よりも安価なため経費の節約から市水と混ぜて便所の洗浄用、蓄熱槽、屋上の散水用として利用し、市水はその他の給水用としています。また、受水槽には緊急遮断弁（地震時に配水を遮断することで破断した配管からの漏水を事前に食い止める）が設けられ、災害時でも水を確保できるようになっています。新中診の排水は感染の危険を避けるため排水種別ごと（医療、高温、一般排水、汚水等）の専用配管とし感染の恐れのある排水は滅菌処理装置で滅菌後、冷却水槽で冷却され市の下水道に放流することとしています。

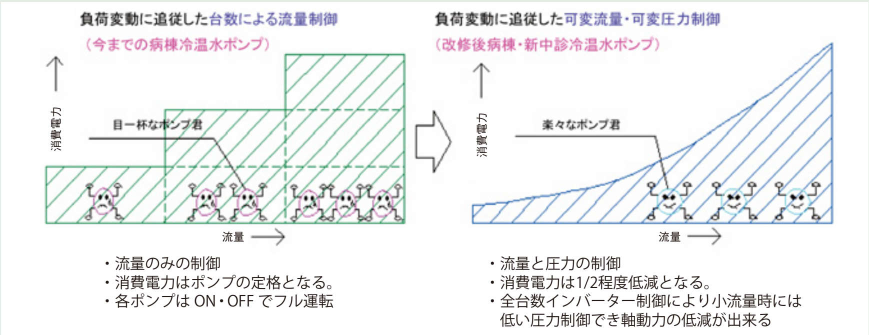
医療ガスはエネルギーセンターからの供給となりますが、新中診の地下２階に医療ガス機械室（酸素ボンベ、圧縮空気、二酸化炭素）が設けてあり、災害時でも単独で供給が可能なシステムとしています。また、講堂の左右の収納部分には OAV（酸素・空気・吸引）のアウトレットが用意されており災害時の外来患者に対応できるようになっています。手術室には余剰笑気排気管が設置され、術者の安全を確保しています。RI 診療室にはインジェクションバキュームを採用（圧縮空気の誘引で吸引する方法）し、専用の吸引機械室を設けず、RI の拡散防止にもつながっています。

新中診には、その他の設備として給湯設備、小型搬送設備、手術室無人廃棄物搬送設備、バーチカルラックシステム（手術部と材料部を結ぶ自動倉庫システム）、RO 水システム（純水製造システム）を装備しています。

キャンパスクローズアップでは、今回までの４回で新中診の建物の紹介をしましたが、紹介したとおり、新中診は現在の建築の最先端の技術を結集して建設されたと言っても過言ではありません。この大事業の期間約５年の間には、国立大学の法人化等、名古屋大学を取り巻く状況が大きく変化しましたが、基本構想から完成まで、附属病院関係者をはじめ、本学施設計画推進室、設計事務所、建設工事業者等、多くの方々のご協力によりこの新中央診療棟を完成することができました。この紙面をお借りして施設管理部から心よりお礼申し上げます。

（施設管理部）

冷温水ポンプの運転方式比較



ミシェル・ザンク博士の講演会を開催

コレージュ・ド・フランス教授で、副学長でもあるミシェル・ザンク博士の講演会が、２月10日（金）、国際センタービル15階の大学院文学研究科オフィスにおいて、21世紀 COE プログラム「統合テクスト科学の構築」（SITES）主催の SITES 講演会として開催されました。

この講演会は、ザンク博士が第１回名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボード（国際諮問委員会）の委員として来日したのを機に開催されたものです。

講演するザンク博士

ザンク博士は、1945年生まれで、1964年にパリ高等師範学校（Ulm）に入学、1976年に弱冠31歳でトゥールーズ大学教授に就任しました。その後、パリ第４大学に移り、1994年に「中世フランス文学」講座の教授として、コレージュ入りを果たしました。2000年にはフランス学士院会員にも選ばれ、エール、バークレィ、ジョンズ･ホプキンズ、ローマなど国外の著名大学にも頻繁に招聘されるなど、この分野の世界的な権威です。ザンク博士は、かつてコレージュの椅子を得ていた批評家のロラン・バルト、詩人のイヴ・ボンウフォワらの系列に連なり、自身もそのことを誇りにされているように、第一級の研究者であるだけでなく、３冊の小説を出版している作家でもあります。

講演会で、ザンク博士は、「現在、文学を研究すること」と題して講演し、一過性の表層的な文学現象が支配する現代社会で、過去の文学的営みとの絶えざる対話がいかに大切かを、コレージュの教授にふさわしい眩いほどの雄弁で説かれ、満座の聴衆を魅了しました。

中等教育研究協議会を開催

●教育学部附属中・高等学校

教育学部附属中・高等学校は、２月10日（金）、「青年期のキャリア形成につながる学びの力－多角的なアプローチを通して－」をテーマに、中等教育研究協議会を開催しました。

この協議会は、同校が平成12年度から文部科学省の研究開発学校として取り組んできた「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発を総括するために開催されたもので、大学院教育発達科学研究科のほか、高等教育研究センター及び大学院文学研究科の教員が研究協力者に加わり、500名近い参加がありました。

総合人間科の授業で、中学１年生に自らのキャリア形成を語る高校３年生

協議会では、５教科と、同校独自の取り組みである総合人間科（総合的学習を活用した「キャリア教育」の取り組み）、ソーシャルライフ（体験的に対人関係構築スキルを学ぶ取り組み）、新教科群（「自然と科学」、「平和と共生の科学」）の授業が公開された後、分科会が、「『総合的学習』から考えるキャリア形成」、「『新教科』の実践から考える教科の学び」、「教室で学ぶ人間関係構築スキル」、「併設型中高一貫カリキュラム評価と学力」、「大学連携講座の取り組みと学びの力」の５つのテーマで行われ、活発な議論が交わされました。続いて行われた全体講演会では、梶田正巳名誉教授が、「21世紀型の学力とキャリア形成」と題して、研究開発の主題である「青年期のキャリア形成」に焦点を当て、21世紀に求められる学力と学校像について講演しました。

なお、同協議会の開催に合わせ、新教科の実践をまとめた『学びをつなぎ未来を拓く－高大連携による「新教科」の授業実践－』が出版され、参加者に販売されました。

2005年度法学部公開講座を開催

2005年度法学部公開講座が､昨年12月から２月にかけて、同学部講義室において開催されました。

この講座は、赤﨑記念研究奨励事業の一環として開催されたもので、全企画で延べ約700名の参加がありました。参加者は、市民が多かったですが、大学院法学研究科や法学部、他学部の学生、企画によっては弁護士、裁判官、司法修習生等の参加もありました。

江川紹子氏による記念講演の様子

同講座では、ジャーナリストの江川紹子氏による記念講演「私の目から見た法律家と裁判－オウム事件を通して」（２月３日）のほか、名古屋地方裁判所、名古屋地方検察庁及び愛知県弁護士会との共催による「裁判員制度を考える－法曹三者と語ろう刑事司法について」（１月28日)、伊藤塾塾長の伊藤　真氏による講演「国民にとって憲法とは－今を生きる私たちの責任」(２月11日)の２つの特別企画、同研究科教員による下記の講座が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。

12月20日　「現代社会とジェンダー」田村哲樹法学研究科助教授
１月17日　「ヨーロッパの政治動向」小野耕二法学研究科教授
１月19日　「日本の法整備支援」
　鮎京正訓法政国際教育協力研究センター教授
１月24日　「難民問題と日本の対応」小畑郁法学研究科教授
１月26日　「日本・中国・韓国の新たな関係－歴史が教える限界と可能性」姜東局法学研究科助教授
２月９日　「中国人の日本意識」
　宇田川幸則法政国際教育協力研究センター助教授
２月10日　「会社法全面改正について」小林量法学研究科教授

李遠哲博士の講演会を開催

1986年に化学反応素過程の動力学的研究でノーベル化学賞を受賞した李遠哲博士（台湾中央研究院院長、名古屋大学名誉博士）の講演会が、２月７日（火)、野依記念物質科学研究館野依記念講演室において、21世紀 COE プログラム「物質科学の拠点形成：分子機能の解明と創造」の特別講演会として開催されました。

講演する李博士

この講演会は、李博士が第１回名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボード（国際諮問委員会）の委員として来日したのを機に開催されたもので、多くの大学院理学研究科物質理学専攻のスタッフ、大学院学生及び学部学生が詰めかけ、立ち見が出るほどの盛況となりました。

講演会で、李博士は､「サイエンス、研究、そして人生！！！」と題して、台湾での幼少時代から、精華大学を経て、カリフォルニア大学で後のノーベル賞受賞につながる反応動力学に出会うまでに体験したことや感じたことについて、OHP 等を一切用いず、聴衆に向かって語りかけました。質疑応答や講演会終了後のミキサーでは、分子線を用いた反応過程の研究で一時代を築いた碩学、李博士の話を直に聞くことができ、若手教員や学生とって非常に良い経験となりました。

第10回理学懇話会を開催

理学部・理学研究科広報委員会が主催する第10回理学懇話会が、１月12日（木）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、「生き物の語る地球史」をテーマに、一般市民を含む約80名の参加を得て開催されました。

会では、小澤智生環境学研究科教授が、「日本の野生動物」と題して、教授らが進めてきた広範な生物遺伝子の分析によって、猪や鹿の大陸からの移動と日本への定着の様子が数100万年にわたって解き明かされたことについて話すとともに、近年、絶滅危惧種が著しく増加していることを強調しました。また、渡邊誠一郎同助教授が、「うなぎと地球科学」と題して、赤道付近の海で生まれるうなぎが日本近海まで回遊するのは、数億年オーダーの大陸移動の名残と理解されると話しました。講演後には、近藤　滋理学研究科教授が、うなぎのくらげ寄生成長説を飛び入りで披露するなど、興味深い質疑応答が行われました。

なお、今回の講演は、４月発行の理学広報誌で特集される予定です。

講演する小澤環境学研究科教授

平成17年度工学研究科懇話会を開催

懇話会の様子

平成17年度工学研究科懇話会が、２月１日（水）、工学研究科４号館大会議室において、「『流動型大学院システム』の点検評価と展望」をテーマに開催されました。

今年度の懇話会は、外部評価の一つと位置付け、平成６年度から大学院工学研究科が進めてきた「大学院重点化」を総括するとともに、今後の展開を模索することを目的として、企業や大学から、４名の懇話会委員を招いて開催されたもので、30名を超える教職員が出席しました。

会では、初めに、昨年９月から進めてきた自己点検評価書を基に、大学院重点化の実施形態である「流動型大学院システム」の説明及び自己点検評価の概要説明が行われました。これを受け、懇話会委員から、忌憚のない貴重な意見が出されるとともに、参加者との間で活発な意見交換が行われるなど、同研究科が新たな一歩を踏み出すよい機会となりました。

医学部附属病院新中央診療棟の施設紹介が行われる

施設見学の様子

昨年６月に完成した医学部附属病院新中央診療棟の施設紹介が、２月９日（木）、総長、理事等を招いて行われました。

井口病院長のあいさつ、大磯病院長補佐による施設の概要説明に続き、出席者は、施設管理部職員の案内で、屋上のヘリポートをはじめ、最新の設備を備えた各階の施設を約１時間かけて見学しました。施設見学では、医療ガス設備を備え災害時には負傷者の処置もできる３階の講堂、天然ゴム系積層ゴム支承とオイルダンパを設けることにより、大規模地震の揺れを抑える地下１階と２階の間の免震層など、安全等に配慮した各設備が紹介され、出席者は感心した様子で説明に聞き入っていました。

施設見学終了後には、懇談会が開催され、出席者と病院関係者の間で病院運営等について意見交換が行われました。

「体の一部を再生する新しい医療」を開催

●医学部

医学部組織工学（日立メディコ）寄附講座及び細胞治療学（ハイメディック）寄附講座は、１月21日（土）、「ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一つとして、「体の一部を再生する新しい医療」を開催しました。

このプログラムは、独立行政法人日本学術振興会が実施している中高校生を対象とした科学研究費補助金による研究成果の社会還元・普及事業で、本学では今年度２件採択されました。

講演の様子

「体の一部を再生する新しい医療」では、同講座の研究対象である再生医療・組織工学・細胞治療の最新研究成果の紹介だけでなく、若い世代に研究の楽しさや難しさ、研究に通じる進路を伝えることを目指したプログラム作りが行われ、その結果、当初想定していた30～40名を上回る60名を超える中高校生の参加がありました。

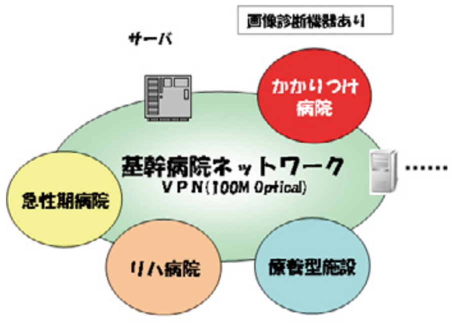
当日は、再生医療についての講演のほか、ビデオ上映、体験実習、研究者の様々な経歴紹介、スナックタイム等が行われ､興味津々に参加する中高校生の姿が見られました。特に、体験実習では、細胞操作や実験操作を行った参加者から驚きの声や歓声があがっていました。アンケートでは、「自分も研究をやってみたいと思った」、「最新の研究にびっくりした」、「動いている細胞を見て衝撃的だった」、「学校では触れられない経験ができて楽しかった」等の声が多く寄せられるなど、近年理系離れの進む中高校生に科学の楽しさを伝えることができました。

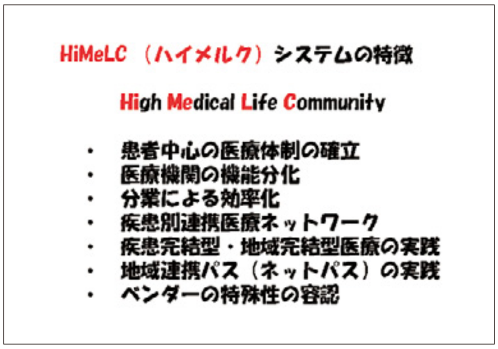
医療セミナー「質の高い連携医療の確立に向けて」を開催

本学と東海医療情報ネットワークコンソーシアムは、２月４日（土）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、医療セミナー「質の高い連携医療の確立に向けて」を開催しました。

このセミナーは、受託研究事業「病院間における医療情報システムの相互運用性に関する調査」（研究代表者：吉田　純医学系研究科教授）の一環として開催されたもので、160名を超える参加がありました。今回のテーマである「連携医療」は、昨年12月の医療制度改革大綱の骨子の一つで、医療機関の機能分化と連携を進め、予防から治療･介護に至る一貫した医療サービスの提供体制を意味しており、質の高い医療を実現するための方法として昨今注目されています。

セミナーでは、吉田教授による「病院中心から患者・市民中心の連携医療の確立に向けて」、野口　宏愛知医科大学高度救命救急センター長による「救命救急医療の最前線」及び小山　樹㈱ジェネラス代表取締役による「介護医療の現状と問題点」と題する講演、伊藤雅治全国社会保険協会連合会理事長による「医療制度改革と医療連携」と題する特別講演が行われ、連携医療をどのように構築すべきか、連携医療はどうあるべきかについて、医療、介護、医療制度といった異なる視点から眺め、患者中心の医療や介護の進むべき方向性を参加者とともに考えました。





基幹病院医療情報ネットワーク

UFJ 環境財団寄附講義総括シンポジウムを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、１月28日（土）、IB 電子情報館大講義室において、財団法人 UFJ 環境財団寄附講義の総括シンポジウム「循環型社会づくりへの挑戦Ⅲ～ UFJ 環境財団寄附講義における３年間の成果とこれから～」を開催しました。

この寄附講義は、UFJ 環境財団の寄附により、平成15年度から「環境問題への挑戦～伊勢湾・濃尾平野から地球環境問題を考える～」と題して、同研究科が担当部局となり、全学教養科目として開講されてきました。また、学内外を問わず、第一線で活躍している専門家を講師に迎え、本学の学生だけでなく、愛知県内の国公私立大学の学生や一般市民にも開放された画期的な取り組みで、受講者には好評を得てきました。

第一部の討論の様子

第一部は、今年度の総合テーマである「環境問題における市民参画と合意形成」と題して行われ、広瀬幸雄環境学研究科教授による基調講演「市民で作る環境基本計画」の後、同教授を座長に、パネリストの小林傳司大阪大学教授、辻　淳夫 NPO 法人藤前干潟を守る会理事長、萩原喜之 NPO 法人中部リサイクル運動市民の会代表理事、浅井直樹津島市役所生活環境課主査が、市民参画で環境計画を作り上げる意義について熱心な討論を行いました。

第二部では、同寄附講義を本学で企画した柳下正治上智大学教授（本学客員教授）を座長に、小林氏、萩原氏、森川高行環境学研究科教授、受講者代表の山田辰義氏、相川良美氏が、同寄附講義の意義と今後の課題について討議しました。

「文理融合型エコシステム科学の展開」ワークショップを開催

●エコトピア科学研究所

「文理融合型エコシステム科学の展開」第１・２回ワークショップが、１月13日（金）、２月2日（木）、エコトピア科学研究所において開催されました。

同研究所では、平成17年度総長・所長裁量経費プロジェクト「文理融合型エコシステム科学の展開」において、自然生態システムと社会経済システムとの両立を図るエコシステム科学に対する文理融合型研究の枠組みについて考究しています。このワークショップは、同プロジェクトの一環として、文理融合的な研究を実践している様々な分野の研究者を招いて開催されたもので、学内外から約40名の参加がありました。

ワークショップの様子

第１回ワークショップでは、研究対象からみた文理融合型エコシステム科学研究の可能性を探求するため、経済学、建築学、社会システム工学、法学、情報学を専門とする学外４名と学内２名の研究者による講演及び総合討論が、また、第２回ワークショップでは、エコシステム科学研究における文理融合型の研究手法について意見交換することを目的として、心理学、エコロジー経済学、環境学、哲学を専門とする学外２名と学内２名の研究者による講演及び総合討論がそれぞれ行われました。各回とも、普段接する機会の少ない異分野の研究者との間で活発な議論が展開されるとともに、ワークショップ終了後の懇親会でも、文理融合型研究について率直な意見が交わされました。

なお、同プロジェクトでは、今回のワークショップに続いて、３月２日に国際シンポジウムを開催しました。

ICCAE 2005年度第７・８回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、12月21日（水）、2005年度第７回オープンセミナーを、１月17日（火）には、第８回オープンセミナーを開催しました。

第７回では、昨年10月から12月まで同センター客員研究員であったヴィサルソック・タッチカンボジア王立農業大学大学院長が、松本哲男同センター教授と共同研究してきた同大学の博士課程のカリキュラム開発に関する研究成果を発表しました。同大学は、同センターとともに改革、開発してきた学部教育と修士課程のコースの成果を基に、博士課程の設置を来年度に予定しており、講演では、博士課程設置の意義と同国の農学分野の問題点が、政策的な観点から強調されました。

第７回オープンセミナーの様子

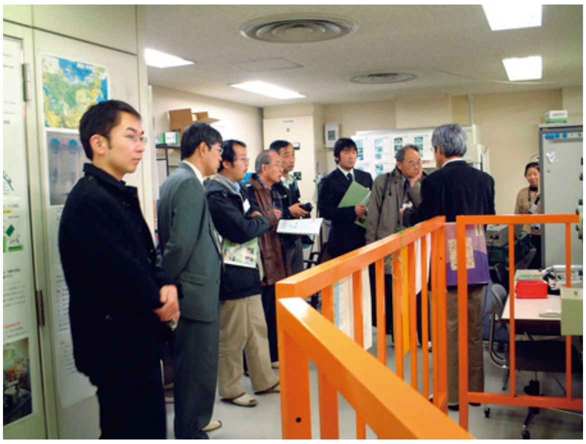
第８回では、西牧隆壮国際協力機構（JICA）農村開発部広域調査員（アフリカ・農業担当）が、日本のODAの目標と実施の仕組み、技術協力主体のJICAの概要と役割、アフリカ農業・農村開発に対する最近の考え方と協力方針等について、多くの写真を見せながら、わかりやすく説明しました。約８割の国民が農村部に居住しているサハラ砂漠以南の国々では、彼らの生活の改善が国の発展につながるという認識の基に、日本の協力が農業開発と農村開発をターゲットにした受益者レベルに目を向けてきていること、2003年の第３回アフリカ開発会議以来、日本が強力に推進しているNERICA（New Rice for Africa）普及事業について、きめ細かい協力が実施されていること、また、アフリカや日本で国際協力に関わる人材の育成が極めて重要であること等が強調されました。

第18回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、１月17日（火）、18日（水）、シンポジオンホールにおいて、第18回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、炭素14年代の測定装置であるタンデトロン加速器質量分析計による研究成果を報告するために、毎年１回開催されているもので、今回は、自然科学から人文科学に至る幅広い分野の研究者や学生、一般市民など88名の参加を得て、４件の特別講演及び15件の一般講演が行われました。



タンデトロン加速器質量分析計２号機の見学会の様子

１日目は、鈴木同センター長のあいさつ、名古屋大学タンデトロン２号機の現状と利用に関する講演に続いて、炭素14年代測定法を放射線物理学・地球科学の分野に応用した研究について、４件の一般講演が行われました。午後は、古川記念館にあるタンデトロン２号機の見学会、炭素14年代測定法を有機地球化学・火山学・植生史学等の分野に応用した研究に関する４件の一般講演が行われた後、Ar-Ar年代測定法及びU,Th-Pb年代測定法について、それぞれ特別講演がありました。

２日目は、イランのギーラーン州における生態考古学的調査に炭素14年代測定法を用いた研究及び熱ルミネッセンス法を用いた火山活動に関する研究について、それぞれ特別講演が行われた後、考古学・文献史学の分野に、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定を応用した研究に関する６件の一般講演がありました。

なお、同シンポジウムで発表された研究成果は、『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書第17号』（平成18年３月刊行）に掲載される予定です。

第８回博物館企画展を開催

－版画に込められた民衆のねがい～中国伝統年画－

企画展

第８回博物館企画展「版画に込められた民衆のねがい～中国伝統年画」が、１月25日（水）から２月26日（日）まで開催されました。

中国伝統年画は、民衆が幸福、蓄財、立身出世、除厄等を願って飾る木版画で、春節（旧暦の正月、今年は１月29日）を祝って、毎年新しいものが家の門口や室内の壁に飾られます。民衆の心を映す素朴な民間芸術として1000年以上も受け継がれ、産地ごとに独特のデザインを生み出しており、現在でも、人々に親しまれています。

同館は、2004年から、名古屋市在住の浅見　汎夫妻より、東アジア各地で収集した膨大な民俗資料を寄贈されています。そのうち、中国伝統年画は、主に、1980年代後半に収集され、半数は中国に寄贈されましたが、残り約700点が同館に収蔵されており、総長裁量経費を得て、同コレクションの整理と調査研究が行われてきました。

今回の企画展は、その成果の一端を紹介するもので、中国年画約45点と版木や刷り道具のほか、ベトナム年画６点と版木が展示されるとともに、中国楊柳青とベトナム・ドンホーにおける年画制作風景の映像も放映されました。会場には、「麒麟送子」と「五子奪魁・五子奪蓮」というテーマが地域によって様々な図柄で表現されていることが一目でわかるコーナー、楊柳青で1960年代と1980年代に制作された同じ図柄の「仕女遊春」を比較して時代による違いを見つけるコーナー、地域による意匠の多様性が実感できるコーナー、佐渡の版画家・三国隆敏氏が制作した版木を使って多色刷りや塗り絵を体験するコーナー等が設けられました。また、年画には、図案に込められたメッセージを読み解く解説が付けられ、来館者の興味を誘っていました。

第14回博物館コンサート

会期初日に行われた第14回博物館コンサート「中国琵琶新春のしらべ」では、涂善祥さんの洗練された演奏等で180名の聴衆を魅了し、また、２月10日（金）に250名の聴衆を集めて行われた第15回博物館コンサート「馬頭琴の世界」では、ボリガさんが奏でる素朴で野生的な馬頭琴の音色が館内に響き渡りました。

２月10日には、コンサートに続いて、第48回博物館特別講演会も開催され、同館研究協力者の辻　千春中京女子大学アジア文化研究所客員研究員が、「飾り絵からプロパガンダまで－中国年画のたどった道」と題して講演しました。辻氏は、中国年画が北宋の時代に印刷文化の発展によって初めて民衆のものになり、当初の守護除厄から次第に娯楽鑑賞の要素が加わったこと、アヘン戦争期には近代化や社会風刺のメッセージが込められるなど題材が社会性を帯びることになり、ここから為政者のプロパガンダを担う「新年画」が発生したことを、多くの図版を使って詳細に説明し、80名の参加者は熱心に耳を傾けていました。

博物館が中学生の職場体験学習を受け入れる

開館前に展示室の清掃をする中学生

博物館は、職場体験学習として、２月７日（火）、８日（水）に、平田中学校２年生２名を、また、９日（木）、10日（金）には、牧の池中学校２年生２名を受け入れました。

初日は、博物館教員から、収蔵資料の保管方法の説明や企画展・常設展の解説を受けたり、展示室の清掃等の開館準備を行ったりしました。午後は、博物館野外観察園を見学し、植物の標本作製に取り組んだ後、キャンパス内の樹木に札を取り付けました。最終日には、博物館コンサート（NUMCo）及び特別講演会の会場設営や案内、資料配付等を教職員と一緒に行い、初めは、小さな声しか出ませんでしたが、最後は、来館者に大きな声であいさつや案内ができるようになりました。

博物館では、地域貢献及び次世代教育という観点から、今後も職場体験学習を受け入れていく予定です。

日本語ボランティア研修会を開催

●留学生センター

講演する池上氏

留学生センターは、２月11日（土）、名古屋国際センター別棟ホールにおいて、東海地方の日本語ボランティアとその希望者を対象に、研修会「学習者の視点に立った教材の選び方」を開催しました。

この研修会は、同センターの地域貢献事業として、㈶愛知県国際交流協会、㈱名古屋国際センター及び東海日本語ネットワークとの共催で行われたもので、100名の定員に対して131名の参加がありました。同センターと上記３団体との連携は５年前から始まり、研修会の共催は今年で４回目となります。

研修会では、中国帰国者定着促進センターで長年、日本語教育に携わってきた池上摩希子早稲田大学大学院日本語教育研究科助教授が、「『学習材』としての教材－学習者の学びを促す材料を探そう」と題して講演し、「学習材」という視点から、学習者のニーズに沿った教材を探し出す方法を披露しました。

先端技術共同研究センターが高度技術研修を開講

水谷　孝工学研究科教授による講義の様子

平成17年度先端技術共同研究センター高度技術研修が、１月24日（火）、同センター研修室において、「機能性ナノ構造体の形成と評価」をテーマに、30名の参加を得て開講されました。

この研修は、民間企業等の技術者や研究者に、高度な専門的技術を習得させることにより、創造性、先見性に富む人材の育成に寄与すること、また、本学の学生や若手研究者に、先端技術分野における最先端データを深く理解させることにより、研究室での研究をより活性化させることを目的として、毎年開講されているものです。

研修では、第一線で活躍している５名の研究者が、カーボン系ナノ構造体、半導体ナノ粒子、磁性ナノ粒子、バイオミメティックナノ構造体等の多様なナノ構造体の形成法と評価法について講義し、受講者には、広範な産業分野における新機能材料として期待を集めているナノ構造体に対する新たな知見を得ることができたと大変好評でした。

法人化後の大学運営にかかわって

山下　廣順　理事・副総長

平成16年３月に定年退官となりましたが、法人化の恩恵を受け、理事・副総長として、引き続き名古屋大学にお世話になってきました。このたび、２回目の定年で退任するにあたり、２年間の思いを述べたいと思います。

そもそも理学出身の人間に総務担当が務まるかという思いと、自然科学的な視点で社会科学を勉強しようという考えが交錯していました。仕事を共にする事務局の方々には、改革期においては研究と同じ発想が、即ち、社会科学の実験をしているという意識が必要であると申してきました。その中で、企画・立案の重要性が認識され、管理運営組織の再編へと進んできたと思います。法人化によって、中期目標・中期計画に基づく年度計画と自己点検・評価の業務が課せられ、さらに、情報の社会への公開・透明性がいわれ、教職員の管理運営に関わる業務が著しく増大しました。業務の合理化・効率化を図るためには、意識改革と人材の育成が重要になります。財政面から見れば、年々予算が削減され、経費の節減と有効活用、さらに、人件費の削減と能力アップが必須の条件となります。また、部局自治の名のもとに、利害と既得権が主張されるが、大学が一つの組織体として機能するには、全学的な視点での判断が求められます。

競争的な環境では、弱肉強食が強調され、ともすれば弱者救済の精神が欠落しがちになります。管理運営には、監査とリスク管理が不可欠となり、未然防止と対策に努めないと大学の基盤を揺るがす問題が生じます。モラルまでが規則で縛られ、不必要な問題を作り出し、無駄な時間を費やすことになります。一人の人間の無力さを認識し、互いに助け合う精神を持って、人間味あふれる職場環境を実現したいものです。情報化・IT 化社会では、徐々に人間の心が蝕まれ、深い思考力が奪われ、最も大きな公害として、いずれ顕在化することになるでしょう。現状を詳しく分析し、10年、20年先を見通した将来構想を考えることが今後の課題であると思っています。名古屋大学の理念と伝統を継承し、研究者の創意工夫により特色ある研究は創出されると思いますが、教育と管理運営においては、何らかの強制力が必要であり、試行錯誤を繰り返しながら、第２期中期計画に向けての展望を見出したいものです。

法人化後の大学改革はまだ緒についたばかりです。多くの課題を残して大学を去りますが、あるべき大学の姿を求めて、総長のリーダーシップのもと、構成員の不断の努力により名古屋大学が益々発展することを期待しています。

本学を去るにあたって

森　　英樹　理事・副総長

京都で学生生活をすごしたあと、1966年に法学研究科に入学してから、私の名大生活は始まったから、ちょうど40年、名大でお世話になった。1968年に法学部助手に採用されたので職員歴は38年、72年に助教授になって講義・ゼミを始めたので教育歴は34年になる。60年代末からの大学紛争と大学改革を駆け出しのころに体験し、70年代後半の揺れ戻しには名大職組（当時は連合会）委員長として対峙し、90年代からの大学院重点化を軸とする「大学改革」には、法学部長として携わった。98年に学部長職を終わり、ようやく「晩年」の研究とりまとめにあたろうとしていたとき、法科大学院設置と大学法人化という激動に遭遇し、もうひと汗かくことになる。それに、学部長時代に重点化概算要求で「目玉」にうたった「体制移行国における法整備支援事業」も、そのスタートにあたって責任の一端を負うことにもなった。

専門が憲法学であるだけに、この国の憲法研究者の多くがつきあってきた「戦後政治」との対峙に私も忙殺されてきたが、そのことは、この専門を選んだときからのいわば覚悟の上であった。だが、大学問題にこうまで多忙な関わりを持つとは、想定外だったというほかない。

法科大学院のメドもつきようやく定年直前の静かな余生を、と思っていた矢先に、法人化初代総長に決まった平野眞一先生から、一緒に汗をかいてほしいと懇願された。これにはさすがに逡巡し、体調にも自信がなく逃げ回っていたが、先生の真摯な直球勝負に根負けして、あわただしく本部の仕事に携わることになる。

相当な準備不足のまま強いられた「国立大学法人化」という「改革」は、それを運営する立場で一歩中にはいると予想を超える課題の山積で、「日々これ新鮮」といえば聞こえはいいが、右往左往の連続が実態であった。担当した人事労務関係では、法人化制度設計の土壇場で教職員が非公務員型とされたため、労働基準法等に従うはずの労使関係が、運営費交付金制度等をとおして、かつての公労法のような制約を受けるという多事多難があって、関係職員の多大な努力でかなり整備してきたが、この種の問題は今も横たわっている。

就任後一年のころに『法学部ニュース』に書いたエッセイでは、司馬遼太郎が明治維新期の活気ある画期を「坂の上の雲」と描いたのを暗くもじって、「坂の上の苦悶」と冗談っぽく表現したが、それは「坂の上」の本部棟から思わず発した冗談抜きのうめきでもあった。ただ、直面してきた諸課題は、まぎれもなく明治維新・戦後改革に次ぐ「第三の改革」の一環であり、その意味では、明治憲法・日本国憲法に次ぐ「第三の憲法」が噂される昨今、私の憲法学研究には、格好の素材でもあった。

理事・副総長の任期を終え名大を去ろうとする今は、このあり余る素材に学問的にどう取り組むか、楽しみに思える昨今である。名大のよき伝統を活かした発展を願ってやまない。

大学における知情意の育成

友杉　芳正　大学院経済学研究科教授

私は大学院を修了後、縁あって現在まで３つの大学にお世話になり、教育と研究に従事して参りましたが、「定年退職」というのは、本当に遠い遠い先のことと思っていました。しかし、その瞬間があっという間にいま将に到来しようとしており、「定年退職」をこの名古屋大学で迎えることになるのは、率直な気持ちとして、ただただ時間の経過の早さに驚くとともに多くの人々に対して感謝の気持ちで一杯です。

思い起こせば、昭和40年代前半、かつての大学紛争時代に大学・大学院教育を受けてきた訳でありますが、その当時は、大学とは何か、大学で何を学び、何を研究すべきかなど、今から思えば幼稚で取るに足らないことかもしれませんが、自分なりに問題意識を持ち、真剣に悩み、将来の進むべき方向性などを模索しつつ、不安が錯綜する中でライフワークとなるものの確立に努力をしてきたことが、極めて懐かしく走馬灯のように思い起こされます。

たまたま専門とした分野が、社会科学の中でも人間行動の発露としての会計行動と監査行動のあり方でありました。文化や宗教などに影響される人間行動といえども、「ある理論・あるべき理論・あるはずの理論」の姿を求めることが可能であり、「存在論・規範論・形成論」としての存立に向けて考究を行ってきました。いわゆる会計学の社会的存在意義が理解され、健全な人間生活に必要な手段として共感を呼び、有用な学問として広く受け入れられるようにするため、教育と研究に微力ながら心血を注いできたと自負しております。

経済社会では、経営者は出資者などのステークホルダーに対し、説明責任を果たし、有用な会計情報を提供する必要がありますが、その信頼性を保証する第三者評価としての監査が要求されています。このような制度は公共的善の思想のもとに公正性を意図して構築されており、その役割を果たす立場の税理士や公認会計士の育成にも力を注いできました。

その際、学部生・大学院生に対し、知性・情感・意思つまり知情意の総合的有機体としてもつ意味の有意義性が理解できるように指導を心がけ、職業倫理規範の実行の重要性を指摘してきました。社会科学は価値判断を抜きにしては成り立たない学問であり、妥当な価値判断として統合的判断がなされることが必要であるため、企業社会の枠組みの中で、会計判断と監査判断が「合法性・合理性・合目的性」を志向する統合的判断として理解されるように主張してきました。

現在、世界がますますグローバル社会へ進展しつつある中で、人類の発展に役に立つ学問の研鑽の場としての大学の存在意義を改めて認識し、自己実現への目的達成のため邁進していくことが必要であると思っております。個人の力は小さいものでありますが、自己の責務の遂行に全力を傾注し、多大な恩義を受けてきた名古屋大学での出会いを大切に、使命感の達成のため、前向きに歩を進めていきたいと思っております。名古屋大学のますますの御発展を祈念致します。

名古屋大学での45年

飯尾　隆義　大学院理学研究科教授

私が名古屋大学理学部へ入学したのが1961年４月。入学後２年間を教養部で過ごした。教養部は滝子の旧制八高あとにあり、講義の一部は旧制名高商あとでも行われた。旧制高校そのままの講義をする教官もいた。古いノートを読み上げて、それを一字一句書き留めさせる文系の講義には閉口した。1963年４月に物理学科に進学して東山キャンパスに通うようになった。当時は四ツ谷通り三丁目に近い山の上の木造二階建ての校舎が教室となっていた。物理の定員は40名であった。３年生歓迎会で教室主任の坂田昌一教授の挨拶は「物理教室は研究第一でゆく、教育は二の次、まして就職の世話はしない」であった。午前十時半に始まる講義や午後の演習などはゆったりとしたものだった。講義をなまける先生がいても誰も文句を云わなかった。興味が湧かない講義は学生がさぼった。大学とはそんなところだと思っていた。自由時間がたっぷりあって好きな分野の勉強を色々することが出来た。当時はゼロックスというものもなく、図書館にしかない本はノートに筆写して勉強した。

卒業後は大学院へ進んだ。他にわずらわされないで一人でこつこつやってゆくことが性にあっていた私は自分のスタイルでやってゆけそうに思われた生物物理の実験研究室Ｋ研を選んだ。新しい研究分野であることも選んだ理由の一つであった。当時のＫ研は分子生物研究施設第三部門と一体になって研究を進めていて、四十そこそこの若い大沢文夫教授がリーダーで十名以上の三十代から二十代の教官と共に一つの研究グループをつくっていた。この研究グループでは、研究は自分で考え自分で決めて自分で実行するものだ、という雰囲気があった。大学院に入りたての我々のアイデアの実現にも色々なサポートがあり、自由に研究を進めさせてもらった。物理学教室では教官も学生もみんな「さん」づけで呼び合っていた。Ｋ研でも同様であった。教官と大学院生との年齢差が少なく、立場の差をまったく感じないで毎日をすごしてゆくことが出来た。このようななかで研究者への歩みを始めた。

研究室は日本の生物物理の中心になっていて、最新の研究の動向を自然に知ることが出来たのも大学院生にとってすばらしいことであった。物理学教室が若く自由な雰囲気をもち、若い教官が大勢で一つの研究グループをつくり、大学院生が教官よりも少数であるといった色々な要素がその時期にかさなりあって私にとってきわめていい環境に身をおくことが出来た。

1970年３月に大学院を終えて日本学術振興会の奨励研究員として半年ほど過ごした後Ｋ研のスタッフに加わった。それから36年、変わることなく自由に研究をさせてもらったことに深く感謝している。

落ち着きと勇気と賢さを

石井　一成　大学院理学研究科教授

真善美の探求に憧れて京都大学理学部に入学したのは1961年でした。以来45年を大学で過ごし退職の時を迎えました。

当初は統計物理の厳密理論を研究していましたが、1972年に九州大学理学部の新設数理生物学講座の助手に採用されたのを機に、数理生物の研究に転じました。

名古屋大学には1983年に教養部物理学教室の助教授として着任しました。その後、教養部の廃止に伴い、1993年に情報文化学部自然情報学科の生物システム論講座に移り、2003年には理学研究科生命理学専攻の生体システム論講座に移りましたが、この間一貫して学部１・２年生に対する一般物理教育を担当し、その傍ら数理生物の研究を続けてきました。

統計物理の研究は寺本研究室で始めました。当時この研究室と基礎物理学研究所は「格子振動論グループ」の拠点の感があり、次々各地から来訪滞在された研究者から、私は統計物理の厳密理論の魅力を教えられました。「確率論グループ」との共同研究会も度々開かれ、数学者との活発な交流の中で、私も、ランダム行列の積に関する極限定理を教えてもらい、１次元不規則系スペクトルの特異性の証明に成功しました。

数理生物の研究は松田研究室で始めました。私は集団生物学グループで分子進化の集団遺伝学的機構について、特に変動選択を重視して研究しました。この際、環境変動率、変異ステップ数、野生型の適応状態の分布などの概念を導入すると共に、数理生物に移って初めて学んだFortranによる数値解析と計算機実験を、従来の紙と鉛筆による数式処理と併用し、いわゆるsynergetical approachの手法を活用しました。

教養部では一般物理の講義と実験を担当しました。学生実験は全く不得手でしたが、同僚に教えられ助けられて、徐々に学生を指導できるようになりました。過密受講さえなければ、実験は講義よりも教え甲斐があると思います。簡単な実験にも人に制御できない部分があり、それに由来する誤差があります。誤差の存在を学習することは教育一般の原点です。

私自身は厳密可解モデルに魅せられて研究をしてきましたが、物理の真髄はやはり現象の近似的認識にあります。未知の現象を発見し、それを良く近似するモデルを構成する時、世界はより良く理解でき制御できるものになるからです。

厳密可解モデルは単純である場合が多く、非現実的であると非難されることがあります。しかし、良い単純モデルは現象の本質を良く近似し、現象を簡潔に把握する上で有用です。厳密可解モデルの探求には果てがありません。

最後に、ここに至るまでに多くの方々からご指導とご支援を頂きましたことを思い、心から感謝いたします。

ふとしたことから知った詩があります。「神さま私にお与えください／変えられないものを受け入れる落ち着きを／変えられるものを変える勇気を／そしてその二つを見分ける賢さを」。私も、そのような気持ちでこれからの人生を送りたいと願っております。

大学としての国際協力貢献

石垣　武男　大学院医学系研究科教授

昭和44年に名古屋大学医学部放射線科の所属となり、途中10年間は国立がんセンター、岐阜大学、名古屋市立大学に勤務したが計28年間名古屋大学に勤務させていただき大変お世話になりました。特に、医学系研究科の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

国立がんセンターの２年間を除くと大学人として活動したことになるが大学という一種独特の雰囲気は私にとって心地よいものであった。名古屋大学人として何をしたのかと問われると貢献らしいことはほとんどしていないが、ひとつだけ非常にインパクトのあった仕事はインドに対する国際協力事業である。

インドにおける熟練医療要員不足に対応するため、インド政府がインド最大の人口を擁するウッタルプラデシュ州の州都ラクナウに建設したサンジャイガンジー医科学研究所に対して、研究、教育、専門科目臨床医療サービスの向上、高度な医療機器に関連した技術協力を行うことが1985年ラジブガンジー首相と中曽根首相との会談で決まった。1986年文部省の要請により名古屋大学医学部はJICAのインドサンジャイガンジー医科学研究所（SGPGI）への医療機材無償供与プロジェクトを担当することとなった。1986－1987年の２年間で33億円余が供与され1989年に機材供与は完了した。この間供与機材の中で金額的に占める割合の高い放射線機器類の担当の一員としてインド側との打ち合わせなどの業務を行った。引き続いて医療協力プロジェクトが1990年から1997年にわたり実施され、名古屋大学からの専門家の派遣、インド側からの研修医の受け入れについて名古屋大学医学部が責任を持って行った。1989年には医学部内にSGPGI協力委員会が組織され、初代委員長の加藤延夫医学部長に引き続いて1992年から私が委員長を務めプロジェクトの推進を行った次第である。

調査団団員、団長、派遣専門家などの立場でインドへ８回出張したのであるが国際協力と一口に言っても大学人として本当に何を為しえたのかということになるとまだ答えが見つかってはいない。当時は大学として国際協力に貢献するという意識はあまり高くはなかったと思うが、このプロジェクトを通じて医学部における国際協力の意識は高まったと認識している。しかしながら、協力相手国の現場で実際に活動する人材を大学から派遣する場合その本人のモチベーションをいかに高めるかという課題を含めて国際協力とは何か、大学に期待されるものは何かという議論がさらに積み重ねられる必要がある。独立行政法人化後においては国際協力という点である面でさらに厳しい状況が生まれつつあるのではないかとも危惧するものである。幸いにも名古屋大学には国際開発研究科が開設されているので学内連携をたかめ、医系の国際協力においても名古屋大学医学部がさらに貢献されんことを期待するものである。

医学部における国際交流活動

伊藤　勝基　大学院医学系研究科教授

この３月で定年退職を迎えるにあたり、皆様に一言ご挨拶と御礼を申し上げます。名大医学部を昭和42年に卒業し、聖路加国際病院で１年のインターンを行った後、名大大学院に入りました。この頃インターン制度に対する反対運動があり、しばらくの間どの大学も医師国家試験ボイコットを含めゆれにゆれました。名大医学部ではその問題の上にさらに小児科教授の選考に絡む問題で紛争に入り10年以上の間暗黒の時代に入りました。昭和44年よりアメリカに留学することにしました。４年後帰国し大学院に復学し、昭和51年に大学院を終了しました。1978年 NJ のレジデント修練のときの恩師が NY 医科大学の外科主任教授になられ、準教授として招聘されました。35歳のときでした。術中術後の患者の循環動態の研究を行い、NY 外科学会で発表した急性膵炎での MDF（心筋抑制因子）が注目を集め、次の年に出た外科の教科書に引用されました。Medical Year Book のその年の Best 100 Paper に選ばれました。NY 医大の準教授としての経験はその後帰国後の国際交流事業の貴重な知識となりました。帰国後留学生担当教官講師の任命を受け以後外科学の傍ら留学生とかかわりを持つことになりました。その当時まだ全国で留学生の総数が１万人前後であったときのことです。以来約18年この任に当たっています。本学学生の海外への留学も手がけることとなりました。医学部の交流協定校は当時 Chapel Hill の North Carolina 州立大学１つだけで、休眠状態でした。留学の希望者を募り20名から１名を選び交換留学させることから始めました。留学希望者が多いため、Harvard 大学、Tulane 大学、Gdansk 医科大学、Pennsylvania 大学、Freiburg 大学と交流協定を結び、毎年各大学に２名ずつの留学生を送るようにしました。単位の互換を認め、休学の必要がないようにしました。相手校からも次々来るようになり、多くの名大の教授にお世話になりました。３年前から Johns Hopkins 大学、Duke 大学とも交流協定を結びこれらの大学とも毎年学生の交流が行われています。Wien 大学とは昨年交流協定を結び、世界一の循環器センターである Houston の UTHSC と本年初め交流協定の提携に成功し早速本年から学生が行く予定になっています。いずれも一流大学であることは名大医学部の学生にとってはよいことでしょう。３－４ヶ月の臨床実習でいずれの学生も活性化されて帰ってきます。今までこの協定を利用して海外留学をした学生は80名を超えました。一流大学との交流のおかげで若手研究者養成の MD、PhD コースの立ち上げも、これらの大学を参考にして近いうちに出来るようです。国の施策であるヤング・リーダーズ・プログラム医療行政部門の修士大学院コースを３年前立ち上げることになりました。幸い優秀な学生に恵まれ帰国後本国でリーダーとなり、活躍しています。名大の国際化の一部が出来たように思います。今後これらの世界の一流大学と対等に付き合えるよう更なる内容の充実を期待したいものです。

成人式を迎える保健学科とともに

猪田　邦雄　医学部教授

医療技術短期大学部に理学・作業療法学科が創設されるのを機に、医学部整形外科から理学療法学科の初代の教授として着任してから20年余が経過しました。教員は教育、研究、管理・運営が重要な責務であると認識していましたが、当初は教授、助教授の２人だけでした。このような中で理学療法が学問として確立され、理学療法学科を理学療法士が中心となって運営できるようになるまでの橋渡しをする大きな役割を負わされていることを知りました。

当時の医療技術者養成は専門学校が主体で、短期大学部といえども研究機関という認識は低いものでした。国立の総合大学に併設されていること、専門職で有ること、技術に対する科学的裏付けと学問としての確立を目指すことなどから、４年制化し、専門分野の研究が出来る大学院を創設することが第一の使命と考えました。４年制に改組するためには、医学部（医学科）の合意が最優先課題でした。当然のことながら、業績や学位の有る教員組織を作ることも重要でした。どこが早く４年制になれるかで国立短大は競い合い、そのための情報収集や他大学の動き等を知るための全国的な活動や文部科学省との接点も必要でした。そこで国立大学理学・作業療法士教育施設連絡協議会に当初から出席し、副会長や会長を務め、医療技術系国立大学の有るべき姿を議論し、多くの要望や提言などをしてきました。一方で、国立を代表して全国理学・作業療法士学校養成施設連絡協議会にも出席し、理事・副会長になり、設立母体の異なる養成校全体のレベルアップを図ってきました。国立の会議には文部科学省が、全国養成校会議には厚生労働省も出席するため、両省の審議委員や視学委員、指定規則やカリキュラム検討委員、国家試験委員などに要請されることとなり、そこで得た教育のあり方や人脈は保健学科の管理･運営にも役立てることが出来ました。

多くの方々のご支援を得て、平成９年には念願の４年制化が実現し、その後大学院修士の卒業生も送り出し、後期課程も18年度で完成しますが、高等教育としてのスタートに立ったばかりで発展途上です。その充実にはこれまで以上の皆様方のご援助も必要です。この間、短期大学部長や保健学科長、評議員等として、管理・運営面でもコメディカル教育の高等教育化に関われたこと、また、それが医師である私に課せられた責務でも有ったことから、当初の自分なりの目標が果たせたと考えています。生い立ちの異なる多くの職種の人々と一緒に仕事ができたことと若い学生達と話ができたことにより、同じ仲間ばかりの整形外科に居ては経験できない多くのことを保健学科に来て教えられました。

最後になりましたが、学生のための大学であることを考える時、保健学科は鶴舞や東山とも離れた大幸キャンパスにあり、学生の負担・不利益や４年一貫教育におけるくさび形カリキュラム作成の困難さ、医学科との共同施設利用・研究の困難さ、実習における学生・教員の負担などがあり、離れたキャンパスへの配慮をお願い致します。

名古屋大学つれづれ草

小林　邦彦　医学部教授

約40年前、学会があって初めて名古屋大学を訪れたとき、豊田講堂以外に目につくのは松林の中に点在する平屋か２階建ての校舎でした。権威を象徴するかのようにレンガ造りの講堂がそびえている大学もありますが、この名古屋大学の風景は若々しさを感じさせるものでした。

大学に入ってすぐに、Scientific American に載った渡り鳥の方言に関する論文を読んだ覚えがあります。渡り鳥は、仲間内の言葉（鳴き声）以外に、はじめて行った地域の方言も理解することができて、たとえば突発的な危険に対して地域の鳥が警告の叫び声をあげたときに、それを危険と認識できるのだそうです。３つの大学、４つの学部を渡り歩いた私自身を渡り鳥に重ねると、それぞれの場所で使われている言葉を理解し、その架け橋になろうと努力してきたといえます。

赴任してまもなく（約20年前）、名古屋大学平和憲章制定の運動が起こりました。部局長・評議員をはじめ、職員組合や生協、院生・学生も加わった、大学ぐるみで、かつ、草の根の運動でした。研究分野や部局による認識の違いも、ねばり強い話し合いで克服して、平和のための大学と学問を誓い、各階層の過半数の署名を得て宣言されました。

数年前、国立大学の「独立行政」法人化が話題になったとき、それが大学の自立性を高めるどころか、高等教育への国家予算の削減と、より強力な大学支配をもたらすことを恐れて、名大の多くの方々とともに反対運動をしました。法成立時の国会決議も無視して、いま、予算が次々と減らされているのはご存知の通りです。機会ある毎に、この制度が日本の高等教育・科学の発展のために不適当なものであることを国民に訴えていくしか解決の道はないと思います。

科学が社会に対して責任を持つ体制の一つは論文の査読制度です。小さな雑誌の編集長をしていて、査読者の姿勢が二極分化していると感じるこの頃です。どんな有名な先生でも、その置かれた立場からの発想には限界があります。若い研究者には思い込みがあります。専門を同じくする他人が少しでも批判的に論文を検討することによって、論文の問題点が見つかり、弱点が補われ、論理が筋道だったものになり、論文の質が高くなります。

大学や団体の運営に関しても、似たようなことが言えるでしょう。幹部がどんなに信頼できる人物であっても、その提案に無批判に承諾を与えることは提案者の期待に応えていません。同僚が批判者として厳しく点検し、もし問題があればそれを指摘してこそ、信頼できる同僚というものです。大学の多層的・民主的な審議制度も、科学の信頼性を保障する査読制度も、不断の努力無しには形骸化してしまいます。私自身、現実には思ったことの十分の一も言えないのですが、気がついたらどんなことでも発言しよう、見過ごしてはいけない、と思っています。名古屋に定住した渡り鳥は、これからも科学や平和について発信し続けたいと考えています。

定年にあたって

森田せつ子　医学部教授

平成３年４月に名古屋大学に赴任して15年経ち定年を迎えました。この日を無事に迎えることができたことを大変ありがたく思っております。この間、陰に陽にご支援くださった名古屋大学の関係者をはじめとする大勢の方々に厚くお礼申し上げます。

平成９年に待望の医学部保健学科として四年制化が実現しましたが、赴任当時は医療技術短期大学部の時代であり、看護、診療放射線技術、臨床検査技術、理学療法、作業療法の５学科と専攻科助産学特別専攻で構成されておりました。その当時の全国における学士課程での看護師養成は平成４年において10カ所であり、他の学問領域と比べると遅れがみられました。平成４年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の成立以降、四年制化は急速に進み、名古屋大学においても大学化に向けての取り組みが急速に進行した時期でもありました。

これまでの教育を振り返り、特に印象に残っていることについて述べてみたいと思います。

平成13年の短期大学部閉校までの10年間を助産師養成のための教育に従事したことであります。

助産師教育の大きな特徴は保健師助産師看護師学校指定規則の規定により、助産学実習における分娩の介助は「学生一人につき10回程度行わせること」とされていることであります。少子化が進行しているなかでその要件を達成するために、実習施設の確保に苦慮しました。また、助産の対象者にとって、「満足のいく出産体験の提供」を念頭に、昼夜問わず、学生実習に携わる機会も多く、学生との関わりを深くもつことができました。また、この10年間に200名余の卒業生を送り出すことができました。現在、助産師教育は大学での助産師・看護師統合カリキュラムに引き継がれておりますが、大学においても有意義な実習経験をもつことができるのは、多くの卒業生の支援の賜物であります。私にとって学生は宝物のような存在でもあるといえます。

次に、専攻長としての任にあたった平成15年～16年の激動ともいえる２年間であります。この期間は保健学科にとって、博士課程後期課程設置が最大の課題であり、文部科学省設置申請に向けての作業は多忙を極めました。医学部、本部の手厚い支援もあり、平成15年11月には後期課程の「設置を可とする」承認をうけることができました。また、16年には教育活動を中心とした外部評価も受けることができ、教育改善に向けその努力の重要性が一層明らかになりました。

名古屋大学では、助産のエキスパートとして、自分自身での教育デザインが反映できた助産師教育に携わることができ、また、四年制から修士課程、博士課程設置に対しても微力ながらも関わることができ、悔いのない大学での教員生活を過ごすことができたことに感謝をしております。

名古屋大学のますますの発展をお祈りします。

定年を迎えて

渡邉　憲子　医学部教授

昭和36年に名古屋大学医学部附属看護学校に入学して以来、45年間、名古屋大学にそして多くの皆様にお世話になりました。卒業後は附属病院の看護師としてスタートし、その後看護学校、医療技術短期大学部、そして医学部保健学科において看護の教育に携わってきました。そして現在、学生たちが自由な発想をもち、主体的にのびのびと行動するのを見るにつけ、専修学校時代から念願した教育の実現に感慨無量です。来年度には大学院博士課程（後期課程）が一期生を送り出して完成する予定で、教員たちも教育・研究に積極的に取り組んでいます。このような躍動感を身近にしながら、定年を迎えることができますことを幸せに思っています。しかし、最大の心残りは保健学科の教育環境、とりわけ校舎の問題です。校舎は老朽化しており、またゼミ室にも事欠く状況があります。改築工事の一部はこの春完成しますが、今、予算上本館工事の見通しがつかなくなっています。学部生・院生が、名大生として誇りをもって学べる教育環境の整備を早急にと切に願っております。

21世紀は少子・超高齢化の時代といわれ、また医療の面から見ると高度先端医療から、全人的医療の時代ともいわれており、その中での看護に期待される役割は大きいと考えています。健康面で人々が求めている QOL はどんなものか。これは私の研究テーマでもあります。少々堅苦しくなりますが、看護の定義（一定義）は、「実在または潜在する健康問題に対する人間の反応を診断し治療することである」とされており、その実践のために必要な基礎的知識・技術の修得とそれらを統合した判断能力・主体的態度を学生の学びに期待しています。「人間の反応」を診断・治療（看護）するには、医学的知識はもとより、人間学、生活の科学に関する知識などが必要です。幸いにも名古屋大学は総合大学であり､文系･理系の学問からのエッセンスを統合して看護学の構築をより進めることができれば素晴らしいと期待するところです。看護は見方をかえれば、直接・間接的に人間相互の関係性で成り立っており、実践場面での相互理解と共感により癒され、相互に人間性を高めて自己実現していくことが看護の本質であると考えます。そしてこのことが看護専門職の魅力でもあると考えています。豊かな感性も要求されます。学生は臨床実習の場で悩みながらも主体的に非常に多くのことを学び、成長していきます。看護の現場と遊離しない実践の科学のあり方を今後いっそう追求しつつ看護学を発展させてほしいと思っています。これは、名古屋大学憲章の理念に則って検討し作成された、看護学専攻の教育目標のより良い実践に期待するものに他なりません。

お世話になりました方々にお礼申し上げますとともに、名古屋大学が自由闊達な雰囲気を保ちつつ、人類のための大学としてますます発展していくことをお祈りいたします。

成りゆきに身を任せての大学教員人生

川泉　文男　大学院工学研究科教授

４年生の配属のガイダンスで、“○○についての研究を是非やってみようという学生諸君に来て欲しい”という趣旨の話をされる大学教員は多い。その通りとも思うが、一方で私は上記の趣旨の発想に少し違和感を感ずる。

高校時代、何となく化学が好きであったので理学部へ進学した。教養部と学部時代、平均的に勉強はしたが、勿論成績も平均的であった。分析化学はピペットなどのガラス器具の検定作業が煩わしかった。有機化学（ふぐ毒研究の大家の平田義正先生の、“有機化学をやりたい人は、まず量子化学を学んで下さい”という言葉を記憶している。）は好きであったが、有機化学実験で、文献記載の通りに操作したのに、いっこうに目的物が合成できないので有機化学の才能のないことはよく実感できた。生物化学実験では実験が『生物主導』で、長時間拘束（３年の学生実験でも何度か夜11時半頃の地下鉄に乗った）がかなわなかった。そこで、消去法で残った物理化学の研究室を選んだ。卒業と同時に指導者であった宮原豊先生が工学部に教授として替わられることになり、宮原先生の“君、一緒に工学部にかわりませんか”の言葉に従い、何もわからないで、工学部の職員となり、以来工学部生活で今日まで来た。理学部化学科の20名の同期生で大学教員となったものは８名いる。高度経済成長時に理系学生が大学教員となるのがいかに簡単であったのかが理解されよう。まさに､私は成りゆきに身を任せて大学教員となった。

成りゆき大学教員の１･２年は人生で一番努力して学んだ。たまたま、論文中にあった raison d'être というわからぬ言葉をきっかけにラジオのフランス語講座を聞いてみたら、それなりに面白く、２年半後に全くの冷やかしで、適当に願書をでっち上げてフランス政府給費留学生試験を受けたら、なぜか合格。その願書中の希望留学期間の欄に１年でなく２年と書いてあったということで２年間の給費留学生生活を送った。１ドルが360円で東京よりパリまでの片道航空料金は給料の６ヶ月分であった。助手の給料は低かったが、２年間の留学が許される優雅な時代であった。

教育は各人がより充実した生活・人生を送るために修得すべき知恵、と思う。教育において、優しい心の育成は１つの柱であるが、優しい心のみで他の人を救うことはできない。知識と技能、意欲、体力とが備わってはじめて他の人を救い、社会に貢献できる。skill としての知識と技能を身につけるためには、教育過程において学生の好き嫌いにかかわらず、繰り返しの訓練 exercise は不可欠となる。テレビの科学番組を一応理解して評論するのがせいぜいの知識は skill ではない。

近年、大学教員には、具体的な技術革新への貢献、さらには起業家としての役割も求められている｡このような面では、私は“不良債権教員”であるが、その私を容認して教員として留まらせて下さった工学研究科の分子化学工学教室、また名古屋大学全体の御厚意に深く御礼申し上げる。

名古屋大学での生活

篠田　剛　大学院工学研究科教授

名古屋大学で何をしたかと言われると、何もしなかったともいえるし、自分なりにはある程度のことはできたとも言えるし、一寸複雑な気がします。私の専門と言えば、金属材料の接合ですが、時代の中で、流され自分を見失ったのかも知れないと思ったりします。

私どもの研究室は、名古屋大学の創世期に着任された関口教授が初代の教授で伝統ある研究室です。先生は日本の溶接界に大きな足跡を残されたが、私はそれと比べるべくもありません。しかし、自分ながらのプロセスを発明、開発し、科学技術振興機構より当時名古屋大学で最も大きな予算を獲得し、恵まれた時代を送ることができたのは幸せと言うべきでしょう。そして、軽薄にも今はやりのベンチャー企業まで立ち上げました。在任中、英国留学ができ多くの友人を得、研究上極めて大きな影響を得ました。このように書くと、恵まれた生活と言われるかも知れませんが、人生山谷があるのは常のことで、上司との間が極めて疎遠になり、暗黒の10年もありました。それでも、論文もある程度書け、多くの優秀な学生に恵まれたことは幸運でした。この一月は身辺整理に追われていますが、大学時代のものは全て棄却すべく奮闘しています。自分にとって最初の論文の別刷りを捨てるときは一寸感傷にふけりましたが、後は一気呵成に進めています。本箱の隙間が広くなるにつれてうれしさがこみ上げ、いかに多くの不用物があったかと思い知らされています。私は、アナログ時代に生きた人間かも知れませんが、デジタルの恩恵を肌に感じています。全て著作を捨てたというのは正確ではなく、全ての私の論文をスキャナーで取込み、データをデジタル化しております。おかげで、200を超える論文がDVD一枚以下と何とも寂しいような、コンパクトな人生になりました。私自身は、今後、名古屋大学を卒業して？、幸いにも企業で働くことになりますが、過去にしがみつかないつもりで、心機一転ゼロからのスタートをするつもりでいます。

この時に役立つのはデジタル技術で、幸運な時代に生きられたものと、感謝しています。論文もインターネットで検索でき、読むことが出来る便利な時代になり、直接関係する特許情報、技術論文を読むにはこれ以上のものはありません。しかし、デジタル検索では、論文集をパラパラめくって、漫然と他人の論文を眺め（読むのではなく）、直接調べている以外の情報を得る楽しみは減ることになります。今までよりは時間的にゆとりも持てそうですから、今後は大いにパラパラめくりをしようと思っております。人間の感性は究極のアナログであり、デジタル化はその感性を助ける手段にすぎないということが忘れられていると思うこの頃ですがいかがでしょうか？やはりあんたは所詮古きアナログ人間との評を受けるかも知れませんが…。もっと、鼻を効かすあるいはアナログ的な感性を磨いて、好奇心を満足させる暮らしをしたいと思う今日この頃です。

ボルツマン方程式を楽しむ

曽我　丈夫　大学院工学研究科教授

1971年の４月に航空学科の助手として名古屋にやってきました。その月の８日、大学前のバス停で雪に降られました。その年の夏、鹿子町の下宿で夜中にせみが鳴くのを不思議な気持ちで体験しました。航空実験棟の中にあった真空チャンバーを使って「電子線発光法による自由噴流中における回転非平衡の計測」実験を始めて、高電圧の絶縁漏れでタンク上部に放電の火花が飛ぶ、怖い思いをしました。工学部職員組合の書記長も名古屋に来て２年目にやりました。応用化学科の爆発事故の被害者の組合員ために、調査委員会の委員やりました。救済基金等ができて若干の進歩があったと思います。名古屋に来て３年目の1974年２月に機会があってフンボルトの基金でドイツのアーヘン工科大学へ研究員として滞在することになり、２年間名古屋を離れました。ドイツ滞在中にゲッチンゲンで開かれた第９回国際希薄気体力学会議に出席して少し新しい知識を仕入れて論文を書いたのですが、Physics of Fluidsにリジェクトとされてしまい意気消沈。それでもあちこちの研究所を訪ね、よく分からない内容ものも聞いて回りました。ドイツ国内、オランダ、フランス、イタリアなど２年間で約４万２千キロを走りました。春にライン河をボーデン湖まで遡る旅、夏にコートダジュールからイタリアへの旅は初めての海外旅行でもあって大変楽しいものでした。アーヘンの衝撃波研究室には私に続いて３名の日本人研究者がやってきて、私のドイツ語の進歩が止まってしまったのが残念でした。名古屋へ戻ってから、先の論文を第10回国際希薄気体力学会議に投稿し発表、同時にボルツマン方程式の理論解析の仕事を始めました。当時の講座主任の保原先生の獲得した外部資金で高性能の電子銃を買い、電子線発光法による実験も軌道に乗りました。残念ながらその後長いこと助手を続け、臨増ポストで講師から教授になりました。大学の運営には特に寄与できませんでしたが、大学院大学化に当たって工学研究科の４系（機械、電子機械、航空の各学科、専攻）のカリキュラム作成に参加して大いに議論したことは楽しい思い出のひとつです。その後の、「民営化大学」が日本人の発明による本当の教育研究組織なのかは検証してゆく必要があるでしょう。

マクスウエル、ボルツマン、ヒルベルト、チャップマン-エンスコグ、グラッドなどの先達の跡をたどりながら希薄気体力学の研究をこの名古屋大学で30年にわたって、楽しみながらやってこられたことに対して、諸先輩、諸兄に感謝します。多くのことを遣り残してしまったことを自戒の念としつつ、自由時間いっぱい（？）の生活を始めたいと考えております。

若い世代の未知への挑戦を願って

高木　克彦　大学院工学研究科教授

大学入学以来、ほぼ人生の大半を名古屋大学で過ごさせて頂きました。その年月は海外留学と企業に就職した一時期を除いて40年以上にもなります。今、これまでの時の流れを振り返りますと、いろいろなことが思い出されます。その当時、楽しかった事はもちろん、苦くつらい経験も今では懐かしいとすら思えてきます。そこにはいつも、「インパクトのある良い研究をしたい」、「社会が認める良い学生を世に送り出したい」と言う使命感と未来への希望を持っていたからだと思います。

同じ専門領域の研究室が集まる「領域専攻」の応用化学専攻の所属から、応用物理、材料系と応用化学系の研究室が集まった結晶材料工学専攻という「複合専攻」に所属が変わって10年近くになります。この間、化学分野の先生方に加えて他の工学系の専門分野の先生方とのお付き合いも深まり、研究・教育への考え方の多様性を実感しました。私自身の研究対象が有機・無機複合系という応用化学でもちょっと異色な分野にもかかわらず、結晶材料工学に移った当初は、その研究対象の多様性にはカルチャーショックを受けたほどです。しかし、この所属替えが異分野の人との交わりと言う極めて大事な経験を生み出し、人間的な面からも、研究上からも大きなプラスとなりました。これからの若い人達には、新しいものへの挑戦を躊躇することなく心がけ、色々な分野の人たちとの交流・共同研究を経て、新しい発想を育て、自分の可能性を信じ、おおいに「未知への挑戦」を心がけて欲しいものです。

私がこれまで大過なく来られたのも、研究室の学生さん、学科や研究科の教職員の方々、同輩・先輩諸氏、また同一専門分野の研究者のみならず、家族や友人などに「多くの恩恵」を受けて来たおかげであることを、その職務が終止符を打つこととなった今、自然と考えられるようになりました。本当に不思議な事ですが、感謝の気持ちでいっぱいです。これからはこれまでの恩返しのため、自身が社会や若い世代に対して、何が出来るか真剣に考えていきたいと思います。自分に残されたこれからの日々を、これまでの経験や知識を生かして何らかの形で社会にお返ししたいと願っております。

長い間、お付き合いいただき、本当に有り難うございました。この愛着ある名古屋大学が今後、益々発展し、さらに充実した大学となることを念願して、退職のご挨拶とさせていただきます。

大学生活45年～10年ごとに1テーマ～

中村　正秋　大学院工学研究科教授

1961年名古屋大学に学生として入学し、大学院を経て1970年教員となり、通算45年間、本学にお世話になりました。45年間、名古屋大学の外に出ることはありませんでしたが、振り返ると、10年ごとに講座を変わり、「化学工学」という大きな枠の中ではありますが、4つの研究・教育分野に携わってきました。20代は燃焼・熱工学講座、30代は反応装置工学講座、40代は移動現象論講座、50代は資源・環境学講座に属しました。今日、教員の流動性が強く求められ、その方法として教員の任期制採用が拡大する傾向にあります。教員の流動化の是非を問えば、「是」と答えざるを得ません。では、流動化の可否を問えば、大々的な流動化を可能にするためには、いろいろ困難な問題を解決しなければならないように思います。

私の場合は、新しい講座が開設された、講座の担当教授が他の機関に移動または定年退職された等の理由で、その都度、所属講座を変わるようにとの辞令をいただきました。ある時は、教授と私（助手）の二人で、居室・実験室の確保、机・椅子や実験機器・消耗品の手配から始めました。こういう場合には、研究・教育が軌道に乗るまでかなりの月日がかかりました。同じ大学にいてもこのような状態でした。他の機関に移って、ゼロから出発する実験系の研究者にとっては、解決しなければならない問題が多いと思います。しかし、世の中の趨勢は「流動化」に向かっていますので、本学においても適切に対応していくことが望まれます。

最近、企業ではコンプライアンス（Compliance）、ガバナンス（Governance）とともにCSR（Corporate Social Responsibility）といった言葉が良く使われます。大学版CSRとも言うべきUSR（University Social Responsibility）が本学にも求められるようになります。国立大学法人になったからと言うわけではなく（仮に、国立大学法人にならなかったとしても）、学内の環境（Environment）・安全（Safety）・衛生（Health）の確保とその水準の向上は、USRを推進していくためには欠かせないことです。

資源・環境学講座を担当していたためでしょうか、60代には廃棄物処理施設長、総長補佐（労働安全担当）に任命され、本学のEHS管理システム構築の一端を担ってきました。「形（仕組み）」を作ることが目的ではなく、これに「心（魂）」を注入して、実践することが大切だと思います。特に、大学は、毎年、多くの新入生を迎え、常に構成員が入れ替わりますので、「どのようにして形に心を入れるか」は永遠のテーマだと思います。名古屋大学の飽くなき前進を期待しています。

40年の永きを振り返って

細江　繁幸　大学院工学研究科教授

大学を卒業して以来、工学部付属自動制御研究施設、情報工学科、電子機械工学専攻と、学内での移動はあったが、ほぼ40年間に渡り名古屋大学で仕事をさせていただいた。その間、多くの先生方、事務・技術職員の方々、卒業生達、幾多の人々に世話になりました。心から感謝申し上げたい。

既に多くの人によって言われていることですが、私達の世代はまさに変化の時代を生きたことになる。生まれたのは戦争中のことです。そして、戦後の混乱期、高度成長期、バブル景気の時代とその崩壊、そして現在と、目まぐるしく変わった。科学・技術の進展は著しい。しかし、この変化が実感できるかというと、個人感覚としてはそうではない。いつにおいても、常に“今”が全てであり、過去も未来も現在に集約され、その瞬間の“現在”がまるで未来永劫不変であるように感じ、生きてきたような気がする。よく言えば適応していると言えるが、しかし実際には過去の様々な問題を忘れ、不問にしつつ、生活していると言うことでもある。だからこそ生きていられるということであろうが､まずいこともある。

この間、大学も大きく変わった。景観はもちろん、研究と教育の推進に関する基本的な考え方にも、大きな変化があったと感じる。たとえば今日では、産学共同は当たり前のことであり、おおいに推奨されている。しかし、30年ほど前には、否定的な意見が少数ではなかった。少なくとも産学共同が当然とは受け取られず、その是非についてかなりの議論がなされた。これを通して、各人は、大学における工学の研究、特に基礎研究はいかにあるべきかについてよく考えさせられた。事態の変化についてはともかく、背景となった考えや論点は継承される必要があると思う。

私はこれまで制御工学の分野で仕事をさせていただいたが、この分野においても、研究の流行が幾つかあった。はじめは最適制御理論である。まさに理想の制御を目指すものであり、宇宙開発競争という時代背景もあって、多くの研究者の研究対象となった。しかし、理論と実際のギャップは大きく、その克服が困難であったことから、研究者の関心はやがて適応制御やロバスト制御などの他の新しい対象に移っていった。ところが、ブームが去って30年も経った最近になって、計算法や計算機性能の著しい進展により、再び最適制御論の価値が見直されつつある。このようなとき、研究の質を決める重要な要因は、組織あるいはグループの過去の実績と継承、すなわち伝統であると、つくづく思う。

これからは、卒業生の一人として、名古屋大学の個性ある発展・躍進を心から祈り、応援してゆきたい。本当に長い間ありがとうございました。

退職を機に思う

道家　紀志　大学院生命農学研究科教授

名古屋大学（農学部）の自由闊達な学風の中で、学生時代と教員時代の45年間を過ごし、自然から学ぶ「知的好奇心を満たす喜び」が味わえる学究の道を歩めたことは幸せであった。それは何よりも、個性的な考え方や確固たる信念をもった多様な教員･学生が相互に切磋琢磨しあえる自由な教育･研究体制を大切にする学風があったからだと思う。感謝の一言である。

そういう恵まれた環境の中で自分がどれだけ優れた研究成果を挙げ学問の発展や社会に貢献したのか、また、どれだけ優秀な学生を世に送りだしたのかと自己評価を迫られると一瞬戸惑う。今様にいう、インパクトファクターの高いNature や Science に掲載されるような研究業績やすぐにも企業化できるような実用的成果を挙げていないからだ。ただ､自らの良心と知的好奇心を大切に自分なりに精一杯やり、自分の研究分野で「Something new and useful」を残し、多くの指導学生が社会で頑張っているという実感はもっている。その評価は世間にお任せしたい。

昨今、人間の欲望をむき出しにした異常な社会現象や事件が多くなったと感じる。文化が高度に発達し物質的基盤が充実することにより人間の欲望の形や喜びの価値が単純には割り切れないものになっている。ただ思うに、金儲けや栄誉に絡む欲望のモノカルチャーほど文化を貧困にするものはない。国立大学も法人化され、稼いだ外部資金、インパクトファクターの高い雑誌への掲載論文数、受賞数、特許取得数など、ややもすると人間の欲望をむき出しにさせる基準で評価･ランク付けされる最近の風潮が気になる。研究者の内なる「知的好奇心を満たす喜び」を追求する精神的な自由こそが学問･研究の推進力だと思うからである。自由な精神と頭脳の活動が浅はかな欲望に影響されてしまう異常な社会現象が大学にも忍び寄っていないだろうか？

自らの専門分野（植物－寄生菌相互作用）の自然現象から学んだことである。「植物病原菌は病原菌であって病原菌でない｣、「作物は罹病性であって抵抗性である」という一見矛盾する法則である。詳しく説明しないが、自然は複雑な相互関係で多様に進化しており、単純な価値観で優劣・損得はつけがたいということである。一見合目的に動いている生物現象でも無駄と思われることがあり、無駄と思ったことが実は合理的である。大学人も忘れがちなことである。

人間社会の欲望はますます自然界の法則とは逸脱した方向にうごめいている。そういう世の中でこそ大学の存在価値が問われ活きる。今日では、個々の知的好奇心を自由に発揮しそれを満たす喜びを追求するだけでなく、「喜びの質」を追求する精神的な自由が必用になろう。その自由が相互に尊重され切磋琢磨されてこそ活きるというものである。「いい時に大学を辞めますね」という友人の言葉が本当にならないことを祈っている。名古屋大学の前途に栄光あれ！

緑地環境と地域住民

横田　浩臣　大学院生命農学研究科教授

里山が今、脚光を浴びている。それは50年前の日本では、大都市でさえも、中心地から少し離れた地域の風景であった。あの風景が現代の生活に疲れた人を魅了するのであろう。

かつての里山は、人と牛と馬がつくりあげた日本の原風景であった。そこで人は生活材料を求め、また農耕に使用された牛や馬（馬は軍用にも利用された）は草を採食した結果、里山ができあがった。すなわち、人は柴を刈りに（薪を拾いに）近くの山へ入った。屋根を葺(ふ)くために、あるいは炭俵や雪囲いのような日用品として利用するためにススキ（別名、カヤ）を刈り取った。さらに広葉樹林は、燃料としての炭を焼くために薪炭林として利用され、二次林が成立していた。その結果、民家近くの山や森は枯れ枝や落ち葉がなくなり、二次林やススキ草原とともに美しく維持されていた。

これに加えて水田の貢献も大きい。日本の農業は極端にいえばコメ作りの農業であり、水田面積を拡大する戦いであった。畦草(あぜくさ)は刈り取られて家畜の飼料や堆肥作りに利用された。これも里山の成立には重要な要素であった。

農学部の講義では「草地学」を担当していたが、家畜飼養学（栄養学）をベースに研究していたので、動物生産（畜産）側から見た草地学である。昨今の動物生産の現場では給与飼料の大半を海外に求めているので、牛の飼育現場では、多くは草地を必要としない。そのため、草食動物による草刈りが無くなり、荒れ地となってしまった草地が多い。里山をつくりあげた原因のすべてが無くなってしまった現在、美しい里山をつくるには人の手を入れなければならない。

現在、かつては多くの里山が成立していた中山間地で農業を営む人は少なくなり、過疎化に拍車がかかっている。昨年末から報道されている大雪対策のニュースからも分かるように、降雪地帯の多くは過疎化が進んでおり、雪下ろし作業が不可能な地域も多い。

そんな過疎地域へ、雪が消える頃になると都市住民は日頃のストレス解消のためにと緑地環境を求めて出かけて行く。最近では、「グリーンツーリズム」という農村滞在型の過ごし方である。このような余暇の過ごし方は、美しい農村景観を提供してくれる人が存在してはじめて成立する。提供者がいなくなれば、われわれはそれを享受できなくなるのだ。このことを忘れてはいけない。

研究生活の後半は動物生産を軸に地球環境を考えてきた。具体的には、岐阜大学流域科学研究所と共同で内蒙古草原の退化の実情を調査・研究してきた。そこでは家畜が急激に増加し、草原退化の原因となっていることは確かであった。しかし、その草原は地域住民の生活の場である。彼らは家畜数を多くして、より多くの収入を得て、より良い生活を望んでいるに過ぎない。

日本のみならず他の多くの国においても、良好な緑地環境と地域住民の生活との共存は難しいものである。

スロー・ライフのすすめ

田野　　勲　大学院国際言語文化研究科教授

私は昭和48年４月に教養部の講師として赴任した。それからほぼ33年が経過したわけだが、月並みながら、それは長かったと言えば長い、しかし、短かったと言えば確かに短い年月であった。赴任してきた当時、全国に吹き荒れていた大学紛争は終息しつつあったが、まだその痕跡が残っていて、たとえば、研究室の衝立には殴り書きされた過激な言葉が消去されずにそのまま残っていた。どこでも同じだったのだなと感慨に耽ったりした。しかしながら、同時に、これから新しい生活が始まるのだという気持ちも強かった。私はそれ以前に、５年間、東京のある私学に勤務していたのだが、それと比べると、名古屋大学はとても広々としていて、開放的であった。豊田講堂の前に立って見下ろしてみると、まだ中央図書館は建立されていなかったし、グリーン・ベルトの並木は植樹されたばかりで、背は低くほっそりとしていて、はるか彼方の山並みを見渡すことができた。さらに、驚いたのは大学構内を公道が走り抜けていることであった。その結果、淡白ではあるが、独特の開放感を醸し出していたのである。

そして、先輩の先生方も、開放的で、寛容であった。多くの先生方が、それぞれの専門分野で、立派な仕事をなさっていたが、だからといって、尊大になったり、偏屈になったりはしなかった。当時、昼休みなどには、みなさんが自然にコモンルームに集まってきては談話を楽しんだ。ときには議論が紛糾することもあったが、基本的には、寛大にお互いを認め合っていたので、遺恨を残すようなこともなかった。そういった意味では、本当に余裕のある楽しい時代であった。もっとも、私は怠惰であるがゆえに、それに甘えて、たいした仕事をすることもなく無為に過ごしてきてしまったわけで、今になって、それを悔やんでいるが、そんな言い訳が通るはずはない。

それから16、７年後に大変革の時代がやってきた。教養部の改組の問題である。いろんな可能性があったが、結局、教養部を解体して、情報文化学部と言語文化部を設立し、さらに、研究活動を一段と活性化するために、研究科を設立して現在に至っているわけだが、ここで忘れてはならないのは、それには必然的に義務がともなってくることである。つまり、それに見合うだけの成果を挙げなくてはならぬことである。しかし、その点に関してはかなり楽観的に構えている。というのも、若き優秀な研究者たちが集まってきて、それぞれが、切磋琢磨して研究に邁進し、立派な業績を挙げてくれているからである。とはいえ、一抹の不安を感じないでもない。というのも、文系の学問にとって、ときには、じっくりと時間をかけて熟成させることが不可欠なことだが、このご時世では、さまざまなノルマをこなすのが精一杯で、その余裕がないからである。最近しきりに、30年前のゆったりと時間が流れていた時代が思い出されるのだが、その底にはそうした危惧感が潜んでいるのかもしれない。感傷でしかないと言われれば、返す言葉もないのだが‥‥。

ありがとう、名古屋大学！　全学向け外国語授業のお薦め

大川　睦夫　大学院環境学研究科教授

29年の間には厭なことも少なくなかったし、今でも、わたしの言動に怒っている同僚もいると思う。だが、今日は「立つ鳥跡を濁さず」という格言に遵って、名古屋大学の総合大学としての利点を活用してドイツ語を効率的に学び、研究だけではなく、余暇の楽しみにも大いに役立てることができたことを、感謝の気持ちをこめて書きたい。

名古屋に来て間もなく、法学部のある教授が院生たちに「どうしてみんな言語センターの『全学向け授業』に出ないのかなあ？」と言ったことがある。側で聞いていて「へー、そんな機会があるのか。」と、すぐに事務室に訊きに行った。「すごいなあ、さすがに総合大学だ！」と田舎者らしく感心して、まずはドイツ語入門コースを申しこんだ。

私は中学の時にスペイン語や中国語を早朝のラジオ講座で齧ったくらい外国語に興味があったので、職業柄ドイツ語の読み書きは何とかできた。けれど、喋ることはあまり自信がなかったので、恥をかかないように入門コースから始めた。その後は、順調に初級から中級へと進んだが、上級コースは文献解読などが中心だったので敬遠した。一番熱心な頃は週に三回別々のドイツ人教員の授業に出た。こうして、私のドイツ語会話の力はめきめき上達した。発音の正確さは別として。

もしBerlitzなどの民間の語学学校に行ったら、週３回５時間で一ヶ月にいくら取られるだろう？それが無料で講義などの空き時間に勉強できることは本当に嬉しかった。その後も、ヴァイマルで２回、３週間ずつ、ヴィーンで１ヶ月ドイツ語会話を勉強した。こちらはただというわけにはいかなかったが、本場でヴィーナ・ヴァルツァを踊るなど色んな楽しみもたっぷり経験した。こうした努力が実って、大学教授はもちろん、芸術家から他人の懐を狙う不埒な連中に至るまで、たいていの人々と物怖じすることなく対応できるようになった。

名大国際言語文化研究科全学向け授業よ永遠なれ！、と言いたい気持ちだ。だが、教職員の多忙化が加速している現状では、私のように総合大学の長所を利用できる人はますます少なくなりそうなのが残念だ。

十年余を一区切りとして三区切り

松原　輝男　大学院環境学研究科教授

細菌の無機窒素代謝研究を名古屋大学で始めた頃は、それが地球の温暖化やオゾン層の破壊の問題と関わるとは思っても見なかった。せいぜいのところ、亜酸化窒素と炭酸ガスとは似ているところがあるので、もしかすると亜酸化窒素が高濃度に存在する環境が窪地あたりに出来て、そこで散歩中の犬が麻酔されたり窒息したりすることもありうるか、という想像程度だった。しかし、自分の研究がたとえば汚水処理問題に基礎的に役立つだろうか、と言う事ぐらいは考えていて、それはその通りだったという事はずっと後になって知った。とりわけ、亜酸化窒素還元酵素の実体がなかなかつかめなくて、意地になってその研究にのめりこんだ。それが分かったと思った時は私の研究生活全年数の三分の一以上を費やしていた。正直言ってかなり疲れた。しかし、この時期の終わりの約二年をドイツで過ごす事が出来た。研究とマイファミリーの育成にほとんどの時間を使えたこの期間は、比較的まっすぐに連続した私の人生という時間の流れに出来た、特別な楽しいΩ型（オメガ型）のループのようだと、今は思っている。

十年ごとに違った研究や仕事上の役割を果たすのではなかろうか、という予感のようなものはあらかじめあったが、次の十年余は教養部改革、いわゆる全学教育改革と教養部組織改革の仕事で文字通り心身が酷使された、と今だに思う。研究上の業績はいいものならばいつまでも記録に残るものだが、私が名古屋大学の改革にそのような役割を果たした事はたちまち忘れられたように思えるし、そんなものだと思える。しかし私自身は、思い出すたびに少なくとも二つの臓器の存在を自覚する。この種の仕事に対する耐性には個人差があるように見えるが、私の場合、心がもたなかったであろう結果として、身ももたなかった。

それでも生き残れたので、次の十年余は情報文化学部・人間情報学研究科、その次は情報文化学部・環境学研究科という関わりで、それらが掲げた目標に沿った（と、少なくとも主観的には思う）教育と研究に従事した。前の二十年余は学生に対する教育から少し手を抜いていた気がした。その償いの意識が多かれ少なかれあって、この三番目の十年余は学生達と比較的良く付き合ったと思う。決して十分付き合ったとは言えない原因は、かなり様々な用事が増加したことにある。あえてそれらを雑用とは言うまい。雑用という言葉には、本当はやらなくてもいいこと、というような感じがある。しかし、なかなか思うに任せない大学における我が身の在り様を何とか保つためには、必要な用事であったのだ、と思わないことにはやりきれない思いが残る。教育と研究にそのほとんどの時間を過ごせるほど器用ではなかったのだ。この最後の三分の一の後半は、楽しかったと言う事ができる。もともと何でも見たがりやの性格が環境科学分野に位置づいたことと、良き教育研究の同僚と共にあったことがその大きな理由であろうと感謝している。

夢を大切に

藤井　直之　大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授

1960年代の終わり頃に初めて訪れた名古屋大学は、時計台のある豊田講堂とその前の見事な緑の芝生が印象的であった。それから二十数年後の1991年４月に、東京から神戸を経て印象深かった「緑の芝の名大」に移ってきた。この15年で、世の中の激変に呼応して大学も大きく変わった。身近なことでは、着任早々の雲仙普賢岳の火砕流によって主に報道関係者が犠牲になったことや、1995年１月の阪神淡路大震災などを契機に、自然災害において専門家と一般の人々との関係が大きく変化した。とくに、2001年に政府による『東海地震の見直し』を受けて、新たに地震防災対策強化地域に指定された名古屋市をはじめとする東海の多くの地域では、警戒宣言が発令されることなく突然地震災害が発生するのだ、という認識が広まった。地震予知に関わる研究者が長年にわたって埋めようと努力してきた「社会の認識とのギャップ」が、少なくとも東海地域ではほぼ解消しつつあると思える状況となった。もっとも、分かり易く物事の本質を伝えることは、いつまでも難しい課題ではあるが。

一方、地球内部の動きを捉える観測網も大きく進化した。全国に1300点余りも展開された国土地理院による GPS 観測網や防災科学技術研究所による高感度微小地震観測網によって、これまで想像するだけで現実的でなかったプレート運動の微小な変動が見えるようになった。たとえば GPS から推定された『東海スロースリップ』や、プレートが沈み込む境界に特徴的な非火山性深部微動とそれに伴う『ゆっくりすべり』の発見など、枚挙にいとまがない。この東海スロースリップや非火山性微動は、プレート境界型の巨大地震の発生に関連するかもしれない現象として、世界の注目の的となっている。『今、東海地域が面白い』のは、経済面だけでなく地球科学の分野でもそうなのである。

名古屋での15年間、実に多くの夢を見させてもらった。環境学研究科の新設と災害対策室の設立に携わったことを始めとして、研究仲間として新しく加わってくれた人との交流は、常に新しい刺激となって心躍るモノがあった。夢を語るときの前提は、『資金と人と時間は無限にある』と考え、知恵を絞ってテクノロジーと空想力の限界に迫ることだと思う。スロースリップや非火山性深部微動などに興奮するのは、これまで夢であったプレート運動の微細な動きを視られるようになったからである。さらに、能動的に地表から地震波や電磁波を地球内部に送って、地下で起きている微小な変動を照らしてみたいとの思いがますます募ってくる。どのように視えるのかを想像するだけでワクワクしてくる。こうして、地震発生や火山噴火に関わる地下の変動を把握することは、いつまでもチャレンジする価値あることなのだと思う。その意味で、激変する環境に惑わされずに夢を追い続けることが一層大切になっていると思うこの頃である。

名古屋大学にて

村木　　綏　太陽地球環境研究所教授

私は、名古屋大学理学部物理学科を卒業し、東京大学宇宙線研究所勤務を経て、縁あって18年前再び名古屋大学に戻り、研究を続けながら教鞭を執ることになりました。当時学長だった故早川幸男先生から「お帰りなさい。名大で頑張って下さい。」と暖かな言葉をかけていただいたのが昨日のような気がします。“光陰矢の如し”、瞬く間に年月は去り、今春定年を迎えることになりました。

名古屋大学に来て一番嬉しかったことは学生諸君と研究できることでした。大学はアカデミックな研究と同時に、若い研究者を育てるという重大な使命があります。私は全国の主要な大学の理科教育について調査したことがありました。理科教育は、法則を示し実験で証明しながら講義と実験を同時進行するのが理想であると考えます。しかし名大を始め殆どの大学では講義室と実験室が完全に分離され同時進行ができません。今後の教育のためにも、講義と実験を一体化させた新講義室が必要と思います。

40年に渡る研究生活は、乗鞍の宇宙線観測、μ粒子のエネルギースペクトル測定、欧州連合原子核機構（CERN）での UA1,UA 7実験、宇都宮市大谷町地上地下連動宇宙γ線実験、ブラックバーチ（NZ）における超新星からのγ線探査、屋久杉と室生杉の放射性炭素（C14）測定、世界７カ所の高山を結ぶ太陽中性子実験と観測網の設立、テカポ・マウントジョン（NZ）での口径60cm 望遠鏡による宇宙ダークマター検出実験、そして2004年12月新設されファーストライトを迎えた口径1.8m 望遠鏡による太陽系外地球型惑星の探査へと続いています。名古屋大学に来てからは、素粒子物理学から天文学そして宇宙物理学や地球物理学の分野にまで幅広く研究テーマを求める研究生活でした。このように私の興味はどんどん広がり、宇宙線と接点のある隣接分野にまで研究は拡張し続けています。人間は年をとることは止められません。“少年老い易く学成り難し”とありますが、学問は常に広がり、変化し、進化するので、それを究めるということは、死ぬまで研究を続けるということなのでしょうか。

幸いにも私は､大病もせず研究生活を送って来られました。教え子達もそれぞれの道を進んでいます。私は自分の研究生活を通して、先入観に捕らわれず自然を公平に見ることの困難さを知りました。真実はそこにあっても気づかないことが多々あるのです。大勢に流されることなく真理を見つけることが大切だと思います。科学は生きています。同じ手法では新しい事実は得られません。従って常に新しいことにチャレンジして、テーマを広げて行くことが、研究を深める上で重要だと思います。

最近、私は研究テーマの一つであるダークマターを『３つのダークマター』（開成出版）という本にまとめました。まだまだ研究のまとめは終わりそうもありませんが、ここに私を支えて下さったすべての方々に深く感謝致します。

名古屋大学　昔と今

今榮東洋子　物質科学国際研究センター教授

昭和44年、関西から名古屋に移り住んだ。前任地である大阪駅近くの大阪大学中ノ島キャンパス（当時）はビルジャングルの真ん中にあったので、名古屋大学の木々に囲まれた広い東山キャンパスは新鮮であった。当時よりは多少減ったが、キャンパス内の緑は今でもまだまだ多い。一方、名古屋の夏の暑いことと冬の寒いことにたった１年で参ってしまい、３年以内に関西に戻ることを願ったのに…40年弱の年月を過ごすことになってしまった。エアコンは当初測定室にのみ設置され、だいぶ後になって居室にも配備されるまで、夏と冬は測定室が特に混んでいた。赴任当時は学園紛争が名古屋大学でも燻っており、ターゲットであった本部や豊田講堂に近い理学部周辺を運動家たちが練り歩いた。あるとき、彼らがＡ館の廊下を通り抜けたときには、研究室をどうやって守ろうかと真剣に考えたことが今でも思い起こされる。近年は、豊田講堂前はイベントの中心地点であり、学園祭の前には太鼓の練習音がＡ館の研究室に心地よく？届いていた。

文部技官と助手の時代には学生実験を担当した。後に卒業実験学生を指導するようになったが、その他の時間を研究実験に費やすことができたことは幸いであった。名古屋大学４年目に博士研究員として渡米した。その頃は渡航が珍しい時代であったので、研究室のメンバーや家族が名古屋駅で見送ってくれた。今はパスポートを必要とする以外には国内旅行と大差ない。

研究形態は電子機器の発展と共に様変わりした。手回し計算機の代わりに電卓、タイプライターの代わりにワープロを使うようになり、明らかに能率が上がった。大阪大学時代にテープを読み取るコンピュータ（の前身？）を研究室で用いていたが、名古屋大学ではカード式になり、やがて、磁気テープが使われた。これらを用いた計算は大型計算機センターのみに限られたが、パソコンの普及はこれらの作業をラボレベルで可能にした。パソコンは情報の伝達手段を変えた。手紙と電話に代わって、地球のどこにでも即刻通信ができる。確かに便利になったが、忙しくもなった。

世紀が改まってから、大学を取り巻く環境が急激に変化し始めた。その発端が何であったかはさておき、時機が到来したのであろう。法人化に伴う大学運営、社会の要請を考慮した大学での科学研究、競争的資金獲得、少子化と関連した大学教育のあり方などの課題が山済みである。大学教員はこれら課題に取り組むことになるが、これらにどのような割合でエフォートするかを考慮せねばならなくなるであろう。

大学におけるプロセス開発研究と産学行政間連携

森　滋勝　先端技術共同研究センター教授

1962年に化学工学科に入学して以来、金属工学科で修士、博士課程および鉄鋼工学科で助手と、名古屋大学で８年間お世話になった後、名古屋工業大学材料開発研究施設で14年、同大学機械工学科で８年間研究生活を送り、1993年から今日に至るまで名古屋大学工学部分子化学工学科および先端技術共同研究センターで充実した大学生活を送らせていただきました。これもひとえに数多くの教職員の皆様と学生諸氏の御支援と御協力のお陰であり、厚く御礼いたします。この間、流動層を中心とした気固系プロセス、ガス化や燃焼等の石炭有効利用プロセス、廃棄物固型化燃料や木粉のリサイクル等の環境プロセスを対象として、新しいプロセスの開発を目的とした研究を行ってきました。しかし、大学における研究は、これらのプロセス内の現象の解明や装置特性に関する基礎的研究と、ベンチスケール規模までの開発に限定されます。したがって、実用規模の開発を行うためには、企業と連携した開発が必須となりますし、多くの場合、行政からの財政的支援も必要です。ことに石炭利用技術などのような大型プロセス開発は、国家規模のプロジェクトになります。これらの場合の大学側の最も重要な役割は、基礎と実用化との橋渡しにあります。当然技術開発は企業の技術者の方々が推進しますが、プロセスのスケールアップや開発過程では、数多くのトラブルを克服するとともにプロセスの挙動を把握することが重要であり、そのためにはプロセス内の流体や粒子の挙動、熱および物質移動、反応過程などの諸現象を基礎的な知見に基づき解明することが必要です。この場合に的確な情報や解析手法を提供するのが大学側の使命です。もし必要な基礎的知見が不十分な場合には大学に持ち帰り、新しい研究テーマとして現象の解明や理論の構築を行うことも必要となります。このように、プロセス開発の中から生まれた研究テーマはその目的が明確になっているため、「研究のための研究」に陥ることもありません。さて、プロセス開発過程において当然多くの特許が発生しますが、これらの特許の多くは要素技術に関するものであり、開発されたプロセスの独自性と優位性を維持するための防衛的特許が大部分で、個別の特許の売買によって利益を生むことはほとんど期待できません。たとえ大学の研究者が独自でこれらの散発した特許を取得したとしても外部資金の獲得にはほとんど貢献できません。

プロセス開発では大学レベルの試験設備であっても、半年や１年はトラブルの繰り返しで運転できないことは珍しいことではなく、不屈の粘りと強い情熱が必要です。しかし、産学行政が連携しながら実用化という共通の目的をめざして、一歩一歩難題を克服しながら技術開発を達成することは、研究者と技術者に取って大きな喜びであり生きがいでもあります。このようにプロセス開発は大変魅力的であり、この分野に関連した若手研究者の方々が臆することなく挑戦していただくことを期待します。

本学関係の新聞記事掲載一覧［平成18年１月16日～２月15日］

	記事	月日	新聞等名
1	常識を疑う：武田邦彦・工学研究科教授　やみくもなリサイクルは資源のムダ　物持ちの良さこそ重要	1.16（月）	日経（朝刊）
2	教育学部附属中・高等学校の中等教育研究協議会「青年期のキャリア形成につながる学びの力」２月10日開催	1.16（月）	中日（朝刊）
3	数理ウエーブ28日開催　糸健太郎・多元数理科学研究科助手らが話す	1.16（月）	中日（朝刊）
4	書評：「環境学研究ソースブック」環境学研究科編	1.16（月）	中日（朝刊）
5	学内に今春開設する保育園の名称が学内公募の結果、「こすもす」に決定　平野眞一総長は、「親しみやすい花の名前であると同時に世界、宇宙を意味する言葉で、成長する子どもたちが羽ばたいて欲しい」という気持ちを込めたと話す	1.17（火）	中日（朝刊）
6	防災対策：飛田潤・災害対策室助教授は、「住宅の耐震改修や家具の固定など、基本的な対策を再点検して欲しい」と呼びかけ、木村玲欧・同助手は、「大事なのは光と食料」と話す　また、鈴木康弘・同教授は、軟弱な地盤に住んでいても「一般の人以上に耐震対策に注意を払うだけでずいぶん違う」と話す	1.17（火）	中日（朝刊）
7	若者に増加　性感染症　吉川羊子・医学系研究科助手に聞く：各自の注意で予防を	1.17（火）	中日（朝刊）
8	法学部が１月～２月に一般や学生対象の公開講座を開催　ジャーナリストの江川紹子さんや伊藤塾塾長・伊藤真さんの講演、法曹三者を招いた裁判員制度を考える企画など	1.17（火）	朝日（朝刊）
9	ときめき時目記：尾関雄一朗さん・本学学生　誕生日に合同説明会会場へ	1.17（火）	中日（朝刊）
10	講演会「心臓・血管病の再生医学」20日開催　室原豊明・医学系研究科教授の講演など	1.17（火）	中日（朝刊）
11	危ない2006ニッポン：福和伸夫・環境学研究科教授は、地域貢献に関心を持つ団塊世代の建築技術者を「耐震コーディネーター」として制度化できないか検討中で、「“講談師”的な研究を進めることが防災力の向上につながる」と確信している	1.17（火）	中日（夕刊）
12	法曹の倫理：森際康友・法学研究科教授　実務家と研究者が協働でよき法曹を育むべき	1.18（水）	朝日（夕刊）
13	福田敏男・工学研究科教授の研究室の池田誠一さん・本学学生らの研究グループは、全身の血管をこれまでにない精密さで立体モデルに再現する技術を開発　池田さんが社長を務めるベンチャー企業「ファイン・バイオメディカル」の製品として販売を開始	1.18（水）	中日（夕刊）
14	18日、友杉芳正・経済学研究科長・経済学部長の後任に荒山裕行・同研究科教授、村上隆・教育発達科学研究科長・教育学部長の後任に寺田盛紀・同研究科教授を選出し、阿草清滋・情報科学研究科長を再任した	1.19（木） 1.20（金）	中日（朝刊） 読売 朝日（朝刊）
15	「自立を支える子育て研究フォーラム―ニート問題を考える」２月４日開催　平石賢二・教育発達科学研究科助教授の講演など	1.19（木） 2. 5（日）	中日（朝刊）
16	地下構造・「地震動」解明すすむ：医学部附属病院の新中央診療棟は、建物が共振しないように免震構造の周期を４秒を超えるように設計　地震波の算定に携わった福和伸夫・環境学研究科教授は、「建築基準法では詳細な予測を設計に反映させる必要はないが、具体的な予測となっているので利用は広まるだろう」と話す	1.19（木）	朝日（夕刊）
17	研究スポット：ピロリ菌　濱嶋信之・医学系研究科教授は、「遺伝子型を調べることで、分解されにくい薬と組み合わせて、より除菌成功率をあげることができる」と話す	1.20（金）	中日（朝刊）
18	20日、新任の理事兼副総長に大峯巖・理学研究科教授、佐分晴夫・法学研究科教授、杉山寛行・文学研究科教授、新設の理事ではない副学長職に宮田隆司・工学研究科教授、学外有識者の参与に奥村洋彦・学習院大学教授を任命した	1.21（土）	中日（朝刊） 他２社
19	本学の元教員や民間企業など学外の有識者を対象とした無報酬の非常勤講師を「招聘教員」として、４月から導入	1.21（土）	毎日（朝刊）
20	大学　生き残りかけ提携：昨年秋、本学としては初の海外現地事務所を上海市に開設　今後、提携している上海交通大学や復旦大学との共同研究推進や本学の情報発信の拠点としての活用を考えている	1.21（土）	中日（朝刊）
21	財団法人東海学術奨励会が平成17年度の研究助成金交付対象者を発表　櫻井志保美・医学部保健学科助手、木村玲欧・災害対策室助手ら10件を選出	1.21（土）	中日（朝刊）
22	第15回漢方シンポジウム「老いに伴う病気と漢方の話」２月26日開催　井口昭久・医学部附属病院長の講演など	1.21（土）	読売
23	ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授　釈迦の一計で改心した鬼子母神	1.22（日）	中日（朝刊）
24	「省エネ住宅普及推進シンポジウム」20日開催　奥宮正哉・環境学研究科教授ら６人によるパネルディスカッションなど	1.22（日）	中日（朝刊）
25	４月から「大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター」、「大学院情報科学研究科附属組込みシステム研究センター」を新設し、太陽地球環境研究所の本部を３月１日に豊川地区から東山地区に移転することを発表	1.23（月）	毎日（朝刊）
26	再生医療、広がる治療対象：本学では患者の脂肪組織から取り出す幹細胞を使って重い腎臓病の治療を目指す　脂肪から取り出す幹細胞は骨や脂肪などにもなるため、「腎臓病のほか、骨粗しょう症など、幅広い病気の治療に使える」と北川泰雄・生命農学研究科教授はみている	1.23（月）	日経（朝刊）
27	合格グッズの人気について、高井次郎・教育発達科学研究科助教授は、「日本人には物事がどう決着するかは個人の努力より第三者や運命にゆだねる気風があり、メーカーなどがそこに着眼し、商品化したことで、元々の国民的性格が顕在化したのでは」と分析する	1.23（月）	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧［平成18年１月16日～２月15日］

	記事	月日	新聞等名
28	With：名古屋大学「ACE」 留学生たちとの交流や留学生の生活を手助けする異文化交流サークル	1.23（月）	朝日（夕刊）
29	博物館は第９回特別展として、「スポーツと名古屋大学　する・みる・つくる」を３月から開催する準備を進めている　足立守・博物館長は、「名大スポーツの隠れた歴史やゆかりの品々を発掘したい。先輩が残した栄光が現役諸君の活躍につながれば」と話す	1.24（火）	中日（朝刊）
30	学生街ダンス：長谷川潤さん・本学学生　王座戦に出場、貴重な対局に満足	1.24（火）	中日（朝刊）
31	第14回博物館コンサート「涂善祥　中国琵琶の世界」25日開催	1.24（火）	中日（朝刊）
32	理学部学生自治会等は、新しい憲法の制定に向けた国民投票法法案などに反対する意見を伝えるため、23日に自民党愛知県連前で同県連職員に抗議文を手渡した	1.24（火）	中日（朝刊）
33	政府の南極地域観測統合推進本部が行っていた南極大陸の基地「ドームふじ」での氷床掘削で採取した円柱状の氷が、４月に観測船「しらせ」で日本に運ばれ、本学や国立極地研究所などで分析される	1.24（火）	中日（夕刊）
34	法学部公開講座「裁判員制度を考える―法曹三者と語ろう刑事司法について」28日開催	1.25（水）	朝日（夕刊）
35	村木綏・太陽地球環境研究所教授を中心とするMOA実験グループは、OGLEグループ、PLANETグループ等、各国観測チームとの共同観測で、重力マイクロレンズ現象による星の増光現象を観測した結果、地球の５倍程度の質量を持つ太陽系外惑星を発見した	1.26（木）	中日（朝刊） 他５社
36	25日、杉山寛行・文学研究科長・文学部長の後任に町田健・同研究科教授を選出し、近藤健二・国際言語文化研究科長、伊藤義人・附属図書館長を再任した	1.26（木）	中日（朝刊） 他２社
37	愛知とかかわりの深い国の外交官と地元政財界の代表者が交流を深める「名古屋国際交流懇談会」が25日に開催され、福田敏男・工学研究科教授が「先端技術の競演、ロボット技術の未来」をテーマに講演した	1.26（木）	中日（朝刊）
38	理学研究科宇宙物理学研究室の赤外線天文学教室（芝井広・同研究科教授）のグループが開発した遠赤外線観測装置を搭載した日本初の赤外線天文衛星「アストロＦ」が２月中旬に打ち上げられる　芝井教授は「アストロＦの成果を元に、『暗黒物質』や星の誕生の過程などに迫りたい」と話す	1.27（金）	中日（夕刊）
39	ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授　世俗的な女神像	1.29（日）	中日（朝刊）
40	全国区へ足掛かり　中部の２国立大学が東京でフォーラム：本学は24日に「名古屋大学東京フォーラム2006」を千代田区の学士会館で開催　お茶の水女子大学長・郷通子・本学名誉教授や伊藤忠商事株式会社取締役会長・丹羽宇一郎・全学同窓会副会長が講演し、卒業生や企業関係者ら約260名が熱心に耳を傾けた	1.31（火）	中日（朝刊）
41	学生街ダンス：尾関雄一朗さん・本学学生　名古屋友禅染で地域の職人技体験	1.31（火）	中日（朝刊）
42	本学と東海医療情報ネットワークコンソーシアムが医療セミナーを４日開催　東海医療情報ネットワークコンソーシアム会長の吉田純・医学系研究科教授の講演など	2. 1（水）	中日（朝刊）
43	東海豪雨水害野並訴訟　住民敗訴：加藤雅信・法学研究科教授は、「『野並ポンプ所が川の合流点より上流に設置されており、流下阻害がさらに助長されるという悪循環が生じた』と言及していることは、市にとっての反省点だ」と指摘	2. 1（水）	読売
44	備える：名古屋の地盤　海津正倫・環境学研究科教授は、「10メートル四方程度の詳細なマップを作らないと、実際に住んでいる建物が建っている地盤について明確な判断はできない」と話す	2. 1（水）	中日（朝刊）
45	叙位叙勲：正四位　礒野謙治・本学名誉教授	2. 1（水）	中日（朝刊）
46	書評：『三河地震60年目の真実』木股文昭・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授、林能成・同助手、木村玲欧・同助手著	2. 2（木）	中日（朝刊）
47	会社を辞めた後の中高年の生き方を考える講座「NPOシニア大学」（全８回）が、１月31日から本学で始まり、初日は、牧野篤・教育発達科学研究科助教授が「私たちが生きてきた社会とあなたの存在」と題して講演した	2. 2（木）	中日（朝刊）
48	訃報：髙木典雄・本学名誉教授	2. 2（木）	中日（朝刊）
49	頑張れ名古屋勢　名岐駅伝チーム紹介：一般の部で、本学チームは大学チームの先頭ゴールと10位以内入賞を目指す	2. 2（木）	中日（朝刊）
50	家族のこと話そう：平野眞一総長　愚直さ重んじた父	2. 3（金）	中日（夕刊）
51	田中周一さん・本学学生が大相撲入りに意欲を見せており、大相撲入りが実現すれば２人目の国立大学出身力士となる	2. 4（土）	読売
52	叙位叙勲：従四位瑞宝小綬章　若林満・本学名誉教授	2. 4（土）	中日（朝刊） 読売
53	ポスト「団塊」採用本番：本学の昨年末時点での就職内定率は前年を１～２ポイント上回る見通し　就職支援室には複数企業の内定をもらった学生から内定をどう断ればよいのか相談が多く寄せられている　一柳明・同室長は「採用枠は増え、さらに『売り手市場』が強まる」とみている	2. 4（土）	朝日（夕刊）
54	2006年名岐駅伝競走大会が５日に開催され、本学チームは一般の部で12位、大学チームのなかでは1位と健闘　主将の本田将浩さん・本学学生は、「ばらばらの練習になることもあるけど、チーム一丸となり、全国の強豪とも渡り合いたい」と話す	2. 6（月）	朝日（朝刊）

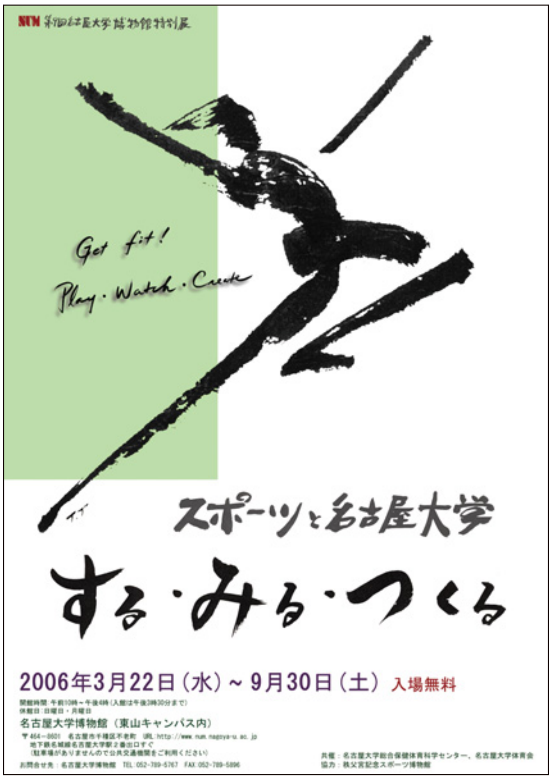
本学関係の新聞記事掲載一覧［平成18年１月16日～２月15日］

	記事	月日	新聞等名
55	研究論文の不正どう防ぐ：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授　規制強化は科学的心理がゆがめられる恐れがあり、防止は科学者の良心に問うべき	2. 6（月）	日経（朝刊）
56	第３回キャンパスベンチャーグランプリ中部に、20の大学・高等専門学校から88件の応募があり、飯田斉さん・本学学生が中部経済産業局長賞を受賞	2. 6（月）	日刊工業
57	第１回名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボード（国際諮問委員会）が、６、７日に開催され、高等研究院に関する提言をまとめた　同委員会は、委員長の理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授をはじめ、赤﨑勇・本学特別教授、ノーベル医学生理学賞受賞者のルイス・イグナロ・米カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教授、ロルフ・シュテュルナー・独フライブルク大学教授、池端雪浦・東京外国語大学長、ミシェル・ザンク・コレージュ・ド・フランス副学長、ノーベル化学賞受賞者の李遠哲・台湾中央研究院院長の７名で構成され、本学の研究や教育について提言を行う	2. 6（月） 2. 7（火） 2. 8（水）	中日（朝刊） 他５社
58	名大サロンの主役：武田穣・農学国際教育協力研究センター助教授　幻の中将棋に挑戦を	2. 7（火）	中日（朝刊）
59	理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら３名のノーベル賞受賞者らが参加して、シンポジウム「21世紀の科学技術のフロントランナーとしてのあるべき姿」が４日に開催され、野依特別教授は、「英語の論文と国際会議出席で国際化が進んだと思うのは大間違い。常に多くの世界第一級の研究者とともに働く場が重要だ」と力説	2. 7（火）	日刊工業
60	名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボード委員で、コレージュ・ド・フランス副学長のミシェル・ザンク博士が10日講演　佐藤彰一・文学研究科教授は、「古代から人々が続けてきた『文学』という営みについて、今世紀も研究する楽しさがあることや、魅力などについて聴くことができる」と話す	2. 7（火）	朝日（朝刊）
61	静岡県立こども病院の放射線技師で、医用画像工学研究室（小寺吉衛・医学部教授）に所属する土屋裕一郎さん・本学学生が、医療機器メーカーと協力して、胸部の動態レントゲン撮影に使用可能な自動患者照合システムを開発	2. 7（火）	静岡新聞
62	愛知県医師会が、「肥満症／メタボリックシンドロームの予防と治療～体に役立つ痩せ方」をテーマに、健康教育講座を14日開催　講師に愛知学院大学教授・佐藤祐造・本学名誉教授	2. 7（火）	日経（夕刊）
63	老年学：井口昭久・医学系研究科教授　来し方走馬灯のように	2. 9（木）	朝日（朝刊）
64	第28回犬山ハーフマラソンの招待選手が８日に発表され、中村高洋さん・本学学生を含む44選手が選ばれた	2. 9（木）	読売
65	文化：ハマスの台頭　影に壁の威圧　中西久枝・国際開発研究科教授	2. 9（木）	中日（夕刊）
66	東海地方1月の地震：林能成・災害対策室助手	2. 9（木）	読売
67	シルバー世代講演会「高齢社会と腎臓病―早期発見、進行予防、腎不全治療のお話―」21日開催　松尾清一・医学系研究科教授が語る	2.10（金） 2.14（火）	中日（朝刊） 日経（夕刊）
68	「生物時計」の仕組みについて、単細胞生物のシアノバクテリアで、時計の振り子にあたるメカニズムを解明した近藤孝男・理学研究科教授らの研究が注目されている	2.10（金）	朝日（夕刊）
69	万博　愛知の記憶：季刊誌「Ｃ＆Ｄ」140号（１月発行）の「愛知万博を記録する」と題した特集で、片木篤・環境学研究科教授は、グローバル・ループを核とした会場に「幹線道路沿いに量販店や大規模ショッピング・センターの仮設建築が立ち並ぶ現実の郊外風景が再現されただけ」とつづる	2.10（金）	朝日（夕刊）
70	「現代ヨーロッパにおける民族をめぐって」18日開催　嶋田義仁・文学研究科教授の講演など	2.11（土）	朝日（朝刊）
71	ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授　息子との再会　仏陀を象徴的に表現	2.12（日）	中日（朝刊）
72	編集長から：災害時を想定し、本学から高蔵寺ニュータウンまでを歩いたことのある中部大学教授・岩田好一朗・本学名誉教授は、「いざという時、住民は自ら考えて行動しなくてはなりません」と話す	2.12（日）	読売
73	家森信善・経済学研究科教授のアンケートで、大学院進学を検討したことがある本学経済学部学生はわずか26.2%にとどまることが分かった　家森教授は、「経済学部の学生は、大学院は就職面での魅力が乏しいと実利的に判断している傾向がはっきりした。今後の大学院の在り方を検討する上で参考にしたい」と話す	2.14（火）	中日（朝刊）
74	「第11回日本更年期医学会ワークショップ」26日開催　吉川史隆・医学系研究科教授の講演など	2.14（火）	読売
75	「地震・防災フォーラム2006」が11日に開催され、建築家の安藤忠雄さんの基調講演や福和伸夫・環境学研究科教授らの参加するパネルディスカッションが行われた	2.14（火）	中日（朝刊）
76	ときめき時目記：尾関雄一朗さん・本学学生　エントリーシートの書き方を習う	2.14（火）	中日（朝刊）
77	第17回名古屋大学防災アカデミー「『鸚鵡籠中記』に1707年巨大地震を学ぶ―名古屋城畳奉行の地震体験」21日開催	2.14（火）	中日（朝刊）
78	生活習慣病予防講演会「肥満を防ぐ生活習慣」19日開催	2.14（火）	日経（夕刊）
79	情報文化学部と名古屋環境取引所は、14日、温室効果ガスの排出権や環境技術を企業間で取引する新しい市場を今秋発足させるため、システムの模擬演習を22日から開始すると発表	2.15（水）	毎日（朝刊） 日経（朝刊）
80	くるま　第２部うつろう覇権：末松良一・本学名誉教授は「モノづくりの力は科学と技術と技能の総和だ」と指摘	2.15（水）	日経（朝刊）

第９回名古屋大学博物館特別展
「スポーツと名古屋大学－する みる つくる－」

名古屋大学博物館では、研究・教育に限らず、様々な角度から「名古屋大学の姿」を学内外に広く紹介すべく、これまで展示活動や、多数の関連イベントを開催してきました。本学には、部活動やレクリエーションなどを通じてスポーツに親しむ多くの学生が在籍しています。これらのスポーツ活動は、大学生活や人間形成の中で重要な位置を占めており、本学はそれらに対して様々な支援を行っています。しかし、こうした活動はその重要性にもかかわらず、一般にあまり認識されていないのが現状です。

そこで、博物館では、総合保健体育科学センターおよび体育会と連携し、第９回特別展として、本学におけるスポーツ活動を大々的に取り上げ、学内外に広く紹介する予定です。以下に、本特別展のいくつかのコーナーについて紹介します。



（1）名古屋大学のスポーツの歴史と概要のコーナー

本コーナーでは、前身校時代を含め、名古屋大学のスポーツ史を振り返ります。皆さんは、昔、名大がスポーツで全国に名をとどろかせた強豪だったことをご存知でしょうか？　例えば、名古屋高等商業学校（名高商）の清川正二氏は、３年生の時、1932年のロサンゼルスオリンピックの100m 背泳で金メダルを獲得していますし、同校の稲垣　登氏は、1924年に全国学生相撲選手権大会で学生横綱になっています。また、昭和初期、第八高等学校（八高）漕艇部は無敵の強さを誇り、テニスでは、昭和12年に八高と名高商が全国大会高校の部と高専の部でアベック優勝しています。新制名大移行後は、陸上競技部の高川敏夫氏が学生陸上競技選手権110m ハードル走で、早稲田、慶応を押さえて優勝しています。このような意外と知られていない名大のスポーツ史を掘り起こし、紹介します。

（2）各運動部の紹介コーナー

ここでは､運動部の現在のありのままの姿を紹介します。このコーナーは、現役の運動部員が自身のアイデアで作成する予定です。知っているようで知らない部員の生活やスポーツのトリビア、ユニークな部活動など、本コーナーには様々な“驚き”がちりばめられていることと思います。

（3）スポーツ科学のコーナー

一流アスリートが“なぜ”強いのか？　また、優れたスポーツ用品とはなにか？　その材質や形状は？　など、科学の視点からスポーツに切り込みます。

スポーツが人間の肉体や精神によい影響を与えることはよく言われますが、本当にそれだけなのでしょうか？　経済学的見地からは？　社会学的見地からは？　特別展関連イベントと合わせ、いろいろな角度から“スポーツ”を検証します。

（4）試合応援コーナー

春から秋にかけて、名阪戦や七大戦、東国体、各種対校戦など、本学にとって重要な試合が開かれます。特別展開催中､それらの試合を皆で応援しようというコーナーです。

（5）スポーツイベント

期間中に総長杯フットサル大会など、各種のスポーツイベントやいくつかのクラブによるデモンストレーションなどを行います。

主　　催：名古屋大学博物館、名古屋大学総合保健体育科学センター、名古屋大学体育会
期　　間：2006年３月22日～2006年９月30日　日・月曜日休館
場　　所：博物館展示室
時　　間：10時～16時（入館は15時30分まで）
入 場 料：無料
問い合わせ先：博物館事務室　TEL 052-789-5767

清川正二氏が、1932年のロサンゼルスオリンピック100m 背泳で獲得した金メダル

稲垣　登氏が、1924年の第６回全国学生相撲選手権大会で優勝したときの横綱免状（中央後ろの書状）と、吉田司家より授けられた練絹

アベック優勝時の記事が掲載されている名高商庭球部講演会誌
（経済学部図書室蔵）

全国高等商業学校陸上競技大会優勝旗、トロフィー、カップ
（キタン会所蔵）

優勝弓　東海学生弓道連盟主催の大会優勝記念品
いつのどのような大会のものかわかっていません。情報をお持ちの方は博物館へご連絡下さい。

附属図書館2006年春季特別展
「地獄物語の世界－江戸時代の法と刑罰－」

附属図書館所蔵資料の中から見つかった「地獄物語」は、伊勢松阪出身の富豪志士・世古恪太郎延世（かくたろうのぶつぐ）が、安政の大獄での悲惨な獄中体験を、独特の軽妙な筆致で書き綴った希有な資料です。

今回の特別展では、この「地獄物語」を詳しく紹介するとともに、大学院法学研究科所蔵資料などを通して、江戸時代の法と刑罰の実態について考えます。

主　　催：附属図書館、附属図書館研究開発室
共　　催：大学院法学研究科、大学院文学研究科
後　　援：愛知県、三重県、名古屋市、松阪市の各教育委員会
期　　間：2006年４月10日(月)～５月5日(金)
　　　　　４月27日(木)は休館
場　　所：中央図書館４階展示室
時　　間：10時～17時（土・日・祝日とも）
入 場 料：無料
問い合わせ先：附属図書館情報管理課庶務掛　TEL 052-789-3667

■ギャラリートーク

日　時：４月15日(土) 13時～15時30分
場　所：中央図書館５階多目的室
講　師：塩村　耕（大学院文学研究科教授）「ドキュメンタリー文学としての地獄物語」
　　　　神保文夫（大学院法学研究科教授）「白洲と牢屋－江戸の裁判事情－」

世古恪太郎延世（かくたろうのぶつぐ）（1824－1876）略伝

文政７年(1824)、松坂西町の富豪黒部屋に生まれる。足代弘訓や斎藤拙堂に学び、弘化２年(1845)には上京して三条実万に面会。以後しばしば公家や諸国志士と交わるが、安政の大獄で江戸送りとなり、病囚を入れる浅草の溜で想像を絶する「地獄」を体験した。

その後、文久２年（1862）、三条実美に召され再び国事に奔走。宮内権大丞に任ぜられ、古社寺の保存法を立案する。明治９年（1876）東京で病没、享年53。

著作に、尊攘派列伝たる『唱義聞見録』、捕縛寸前までを記録した『銘肝録』、捕縛・入牢体験を綴った『地獄物語』『東行日記』などがある。

肖像写真（松阪市図書館郷土資料室提供）
　世古延世の風貌をうかがうことの出来る肖像写真が一葉だけ残っている。頭が断髪なので、維新以後、五十歳前後の晩年であろう。夏だったのか、絽の羽織に袴を着し、腰掛けに軽く腰を落としている。面長で知的な顔立ちに、若き日の熱血の名残りがあるように思われるのは気のせいであろうか。これが『地獄物語』の著者の姿である。

検屍必挈（けんしひっけい）（大学院法学研究科所蔵）
　入墨は、将軍吉宗が導入させた刑罰であるが、形状と部位から、どこで入墨刑を受けたかが判別できるようになっていた。

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
3月18日（土） 場　　所：環境総合館レクチャーホール 時　　間：13時30分～17時 ［問い合わせ先］ 災害対策室　052－788－6038	**シンポジウム「災害弱者をどう救うか～外国人への情報提供を考える～」** プログラム ・13時30分～13時45分 　開会に際して　外国人を災害弱者としないためには 　　岡本耕平環境学研究科教授 ・13時45分～14時30分 　阪神・淡路大震災で私たちがやってきたこと 　　田村太郎財団法人自治体国際化協会参事 ・14時30分～15時15分 　新潟県中越地震で私たちがやってきたこと 　　羽賀友信長岡市国際交流センター長 ・15時30分～17時 　パネルディスカッション 　「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」
3月27日（月） 場　　所：博物館展示室 時　　間：11時～12時30分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052－789－5767	**第16回名古屋大学博物館コンサート（NUMco）** テ ー マ：日韓オカリナ交流 演 奏 者：加藤いつみ 他

トピックスの表紙で綴る豊田講堂の一年

143号（2005年４月）

144号（2005年５月）

145号（2005年６月）

146号（2005年７月）

147号（2005年８月）

148号（2005年９月）

トピックスの表紙で綴る豊田講堂の一年

149号（2005年10月）

150号（2005年11月）

151号（2005年12月）

年頭特別号（2006年１月）

152号（2006年１月）

153号（2006年２月）

名大トピックス No.154　平成18年３月15日発行
編集・発行／名古屋大学広報委員会
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）
TEL. 052-789-2016　**FAX.** 052-788-6272　**E-mail** kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/）でもご覧いただけます。

表紙

平成18年度入試合格発表。豊田講堂前庭にて。（平成18年3月9日撮影）

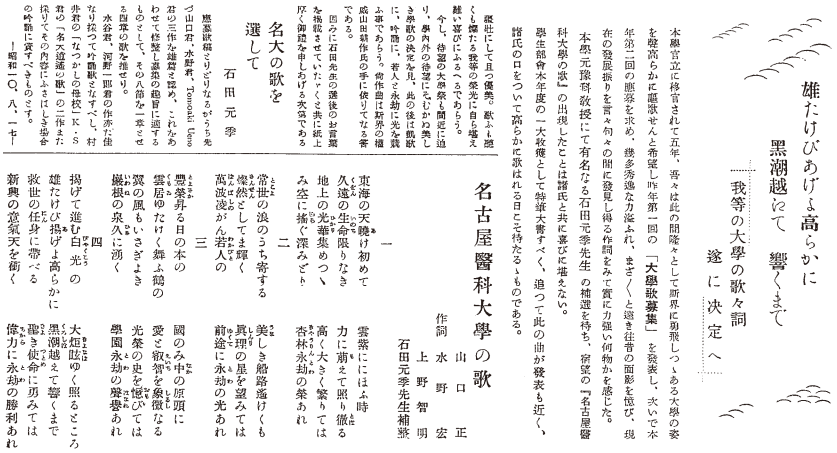
47 名古屋大学と歌

一昨年、東京大学では、新校章とともに「東京大学の歌」を定めることになり、歌詞を一般公募しましたが、名古屋大学では1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立されて以来、校歌や大学の歌と正式に呼ばれるものを持ったことはありません。たとえば入学式では、1956年に学内公募で選定された「若き我等」が、歓迎の歌として混声合唱団によって歌われますが、「学生」歌であるため、大学院関係の式典では歌われていません。

しかし、名帝大創立以前の前身諸学校の多くには、それぞれ校歌が見られます。名大史において明らかになっている最も古い校歌は、1908（明治41）年に創立された旧制第八高等学校（旧教養部の前身）の校歌です。ついで、1920（大正９）年に愛知県立医学専門学校から昇格した県立愛知医科大学（医学部の前身）では、昇格祝賀歌の１つで、第３師団軍楽隊作曲・石田元季教授作詞のものが校歌として歌われました。また官立となった後の1935年には、山田耕筰作曲・公募作詞による「名古屋医科大学の歌」が選定されています。1920年創立の名古屋高等商業学校（経済学部の前身）でも、その翌年に校歌が作られました。

もっとも、学生の多くが寮生活を送っていた戦前にあっては、校歌よりも寮歌の方が学生だけでなく市民にも親しまれ、盛んに歌われました。たとえば八高では、いわゆる校歌よりも、代表的な寮歌「伊吹おろし」の方が圧倒的に有名であり、現在の名大でも体育会や学生寮などで歌い継がれています。

寮歌といえば、教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校には校歌がなく、寮歌が校歌であると位置づけられています。これは同校が1945年の敗戦の直前に創設され、さらにその直後に空襲で校舎が焼失するなど校歌を作る余裕がなく、名大へ包括されたのち1952年には廃止されてしまったからでもあったようです。



雄たけびあげよ高らかに
黒潮越にて　響くまで
我等の大學の歌々詞
遂に決定へ

本學官立に移官されて五年、吾々は此の間隆々として斯界に勇飛しつゝある大學の姿を聲高らかに謳歌せんと希望し昨年第一回の「大學歌募集」を發表し、次いで本年第二回の應募を求め、幾多秀逸な力溢ふれ、まざ〳〵と遂き往昔の面影を憶び、現在の發展振りを言々句々の間に發見し得る作詞をみて實に力强い何物かを感じた。

本學元豫科教授にて有名なる石田元季先生の補選を待ち、宿望の『名古屋醫科大學の歌』の出現したことは諸氏と共に喜びに堪えない。

學生部會本年度の一大收獲として特筆大書すべく、追つて此の曲が發表も近く、諸氏の口をついて高らかに歌はれる日こそ待たるゝものである。

雄壯にして且つ優美。歌ふも聽くも燦たる我等の榮光に自ら堪え難い喜びにふるへるであらう。

今し、待望の大學祭も間近に迫り、學内外の待望にそむかぬ美しき學歌の決定を見、此の後は凱歌に、吟誦に、若人と永劫に光を競ふ事であらう。尙作曲は斯界の權威山田耕作氏の手に依りてなる筈である。

因みに石田先生の選後のお言葉を掲載させていたゞくと共に紙上厚く御禮を申しあげる次第である

名古屋醫科大學の歌

作詞　山口正
水野宏
上野智明
石田元季先生補竄

一

東海の天曉け初めて
久遠の生命限りなき
地上の光華集めつゝ
み空に搖ぐ深みどり
雲紫ににほふ時
力に萠えて照り徹る
高く大きく繁りては
杏林永劫の榮あれ

二

常世の浪のうち寄する
燦然として輝く
萬波淩がん若人の
美しき船路遙けくも
眞理の星を望みては
前途に永劫の光あれ

三

豐榮昇る日の本の
雲居ゆたけく舞ふ鶴の
翼の風もいさぎよき
巖根の泉久に湧く
國のみ中の原頭に
愛と叡智を象徴なる
光榮の史を憶びては
學園永劫の聲譽あれ

四

掲げて進む白光の
雄たけび揚げよ高らかに
救世の任身に帶べる
新興の意氣天を衝く
大炬眩ゆく照るところ
黒潮越えて響くまで
聖き使命に勇みては
偉力に永劫の勝利あれ

名大の歌を選して

石田元季

應募歌稿とりどりなるがうち先づ山口君、水野君、Tomoaki Ueno君の三作を雄篇と認め、これをあわせて修整し襲集の趣旨に適するものとして、その八節を一章とせる四章の歌を推せり。

水谷君、河野一郎君の作亦た佳なり採つて吟誦歌となすべし、村井君の「なつかしの母校」K・S君の「名大逍遙の歌」の二作また採りてその内容にふさはしき場合の吟誦に資すべきものとす。

―昭和一〇、八、一七―

1　「名古屋医科大学の歌」の歌詞決定を報じる『名大学友会報』創刊号。これに、当時すでに世界的な作曲家であった山田耕筰が曲をつけた。
2　八高の寮歌集（1978年刊）。寮歌などが100曲以上収められている。
3　岡崎高等師範学校振風寮寮歌（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）。その哀調を帯びたメロディが寮生はじめ学生に愛唱された。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。